

活人形

泉鏡花

青空文庫

急病 系凶 一寸手懸 宵にちらり 妖怪沙汰

乱れ髪 籠の囀 幻影 破廂 夫婦喧嘩 み

るめ、かぐはな 無理 強迫 走馬燈 血の痕

火に入る虫 啊呀！ 同士討 虐殺 二重の壁

赤城様——得三様 旭

一 急病

雲の峰は崩れて遠山の麓ふもとに靄薄もやく、見ゆる限りの野も山も海も夕陽あかねの茜そに染みて、遠近おちこちの森の梢こずえに並ぶ夥多あまた寺院の藁いらは眩かまく輝きぬ。処は相州東鎌倉雪の下村……番地の家は、昔何某なにがしとかやいえりし大名邸やしきの旧跡あとなるを、今は赤城得三あかぎが住家とせり。

門札かどふだを見て、「フム此家ここだな。と門前に佇たたずみたるは、倉瀬泰助なりという当時屈指ふるきぎの探偵なり。色白く眼清まなますしく、左の頬ほに三日月なりの古創ふるきぎあり。こは去年の春有名なる大捕物をせし折、鋭なき小刀イフにて傷きずけられし名残なごりなり。探偵の身にしては、賞牌しょうはいともい

いつべき名誉の創痕きずあとなれど、衆ひとに知らるる目標めじるしとなりて、職務上不便を感じること尠すくなからざる由を啣かこてども、巧たくみなる化粧ぬりかくにて塗抹ぬりかくすを常とせり。

倉瀬は鋭き眼にて、ずらりとこの家を見廻し、「ははあ、これは大分古い建物だ。まるで画えに描いた相馬の古御所というやつだ。なるほど不思議がありそうだ。今に見ろ、一番正体を現してやるから。と何やら意味ありげに眩つぶやきけり。

さて泰助が東京よりこの鎌倉に來りたるは、左のごとき仔細しさいのありてなり。

今朝東京なる本郷病院へ、呼吸いきも絶たえだえ々に駈かけこ込みて、玄関に着くとそのまま、打倒れて絶息したる男あり。年は二十三にして、

扮装みなりは好よからず、容か貌かたちいたく憔やつれたり。検死の医師の診察せるに、こは全く病氣のために死したるにあらで、何にかあるらんに、劇はげしき毒あたに中あたりたるなりとありけるにぞ、棄置あき難しと警官がとりあえず招寄せたる探偵はこの泰助なり。

泰助はまず卒倒者の身体を検して、袂たもとの中より一葉の写真を探り出だしぬ。手に取り見れば、年の頃はたち二十歳ばかりなる美うつくし麗き婦人おんなの半身像にて、その愛々かんじしき口許くちもとは、写真ながら言葉を出ださんばかりなり。泰助は莞爾かんじとして打うちうなず領うき、「犯罪の原因と探偵の秘密は婦人おんなだという格言がある、何、訳はありません。近い内にきつと罪人を出しましょう。と事も無げに謂いう顔を警部は見遣みやりて、「君、鰻うなぎでも食くつて死しによつたのかも知れんが。何も

毒殺されたという証拠は無いではないか。泰助は死骸しかいの顔を指さして、「御覧なさい。人品ひとがらが好よくつて、瘦やせつこけて、心配のありそうな、身分のある人が落魄おちぶれたらしい、こういう顔色かおつきの男には、得て奇妙な履歴があるものです。と謂いつつ、手にせる写真を打返して、頻しきりに視ながめていたりけり。先刻より死骸の胸に手を載せて、一心に容体を伺かいたる医師は、この時人々を見返かえりて、「どうやら幽かすかに脈なが通う様です。こつちの者になるかも知れません。静しずかにしておかなければ不可いけませんから、貴あなた下方がたは他あ室つちへお引取下さい。警部は巡査を引連れて、静まにこの室まを立去りぬ。

泰助は一人残りて、死人の呼吸いきを吹返さんとする間際には、秘

密を唸り出す事もやあらんと待構うれば、医師の見込みは過たず、
ややありて死骸は少しずつの呼吸を始め、やがて幽に眼を開き、
糸よりもなお声細く、「ああ、これが現世の見納かなあ。得た
りと医師は膝立直して、水薬を猪口に移し、「さあこれをお飲み
なさい。と病人の口の端に持行けば、面を背けて飲まんとせず。
手をもて力無げに振払い、「汝、毒薬だな。と眼を睜りぬ。これ
を聞きたる泰助は、（来たな）と腹に思うなるべし。

医師は声を和けて、「毒じやない、私は医師です。早くお飲み
なさい。という顔をまず屹と視て、やがて四辺を見廻しつ、泰助
に眼を注ぎて、「あれは誰方。泰助は近く寄りて、「探偵吏です。
「ええ、と病人は力を得たる風情にて、「そうして御姓名は。

「僕は倉瀬泰助。と名乗るを聞いて病人は嬉しげに倉瀬の手を握り、「貴下が、貴下があの名高い……倉瀬様さん。ああ嬉しや、私は本望が協かなつた。貴下に逢えば死しんでも可いい。と握りたる手に力を籠めぬ。何やら仔細あるべしと、泰助は深切に、「それはどういう次第だね。「はい、お聞き下さいまし、と言わんとするを医師は制して、「物を言つたり、配きあつかい慮かをしては、身体からだのために好くない。と諭せども病人は頭こうべを掉ふりて、「悪僕、——八蔵奴めに毒を飲まされましたから、私はどうしても助りません。「何、八蔵が毒を。……と詰寄る泰助の袂ひを曳ひきて、医師は不興氣に、「これさ、物を言わしちや悪いというのに。「僕は探偵の職掌だ。問わなければならぬ。「私は医師の義務だから、止めなければな

りませぬ。と争えば病人は、「御深切は難^{ありがと}有う存じますが、とても私は助りませんのですから、どうぞ思つてゐることを言わして下さいまし。明日まで生延びて言わずに死ぬよりは、今お話し申してここで死ぬ方が勝手でございます。と思ひ詰めてはなかなかに、動くべくも見えざりければ、探偵は医師に向いて、「是非が無い。ああいうのですから、病人の意にお任せなさい。病人はまた、「そうして他の人^{ほか}に聞かしようございませぬから、恐入りませんが先生はどうぞあちらへ。……とありければ、医師は本意^{ほんい}無げに室の外^{おもて}に立出でけり。

二 系図

病人は苦痛を忍びて語り出だしぬ。

我は小田原の生うまれにて本間次三郎という者。幼少の折父母を失いければ、鎌倉なる赤城家に嫁ぎたる叔母の許もとにて養われぬ。仮の叔父なる赤城の主人はあるじ大酒のために身を損いて、その後病死したりしかば、一族同姓の得三といえるが、家事万端の後見せり。

叔母には下枝しづえ、藤とて美しき二人の娘あり。我とは従兄いとこ妹同士にていずれも年紀としは我より少わかし。多くの腰元にかしず齊眉かれて、荒き風にも当らぬ花なり。我は食客の身なれども、叔母の光を身に受けて何不自由無く暮せしに、叔母はさる頃病氣やまいに懸かかり、一時に吐血してその夕ゆう敢あえなく逝みまりぬ。今より想えば得三が毒殺なせしもの

なるべし。さる悪人とはその頃には少しも思いがけざりき。

されば巨万の財産を挙げて娘の所有となし、姉の下枝に我を娶
 わせ後日家を譲るよう、叔母はくれぐれ遺言せしが、我等の年紀
 の少かりければ、得三は旧のまま一家を支配して、己が随意にぞ
 振舞いける。

淑母死して七七日の忌も果てざるに、得三は忠実の仮面を脱ぎ
 て、ようやく虎狼の本性を顕したり。入用る雑用を省くと唱え、
 八歳といえる悪僕一人を留め置きて、その余の奴僕は尽く暇を取
 らせ、素性も知れざる一人の老婆を、飯炊として雇い入れつ。
 こは後より追々にし出ださんずる悪計の、人に知られんこと
 を恐れしなりけり。昨日の栄華に引替えて娘は明暮不幸を啣ち、

我も手酷く追使わるる、労苦を忍びて末々を樂み、たまたま下
 枝と媾曳してわずかに慰め合いつ、果は二人の中をもせきて、
 顔を見るさえ許さざれば垂籠めたる室の内に、下枝の泣く声聞く
 毎に我は腸を断つばかりなりし。

数うれば三年前、一日黄昏の暗紛れ、潜かに下枝に密会い、
 様子を聞けば得三は、四十を越したる年にも恥じず、下枝を捉え
 て妻にせん。我心に従えと強迫すれど、聞入れざるを憤り、日に
 日に手暴き折檻に、無慙や身内の皮は裂け、血に染みて、紫色
 に腫れたる痕も多かりけり。

下枝は我に取継りて、得堪えぬ苦痛を訴えつつ、助けてよ、
 と歎くになむ。さらば財産も何かせむ。家邸も何かせむ、皆得三

に投与えて、かかる悪魔の火宅を遁れ、片田舎にて気散じに住み
 たまう気は無きか、連れて遁げんと勧めしかど、否、先祖より伝
 わりたる財産は、国とも城ともいうべきもの、いかに君と添いた
 いとて、人手には渡されず。今得三は国の仇、城を二十重に囲ま
 れたれば、責殺されんそれまでも、家は出でずに守るといふ。男
 勝りの心に恥じて、強いてとも言い難く、さればとてこのままに
 ては得三の手に死ぬばかりぞ、と抱き合いつつ泣きいたりしを、
 得三に認められぬ。言語道断の淫戯者片時も家に置難しと追出
 されんとしたりし時、下枝が記念に見たまえとて、我に与えし写
 真あり。我はかの悪僕に迫立てられて詮方無く、その夜赤城の
 家を出で、指して行方もあらざればその日その日の風次第、寄る

辺べ定めぬ捨すて小舟、津や浦に彷徨さまようて、身に知る業わざの無かりしか
 ば、三年越しの流浪にて、乞こつじき食の境遇にも、忘れ難きは赤城の
 娘、姉あねいもと妹ともさぞ得三に、憂つらい愁い目を見るならむ。助くる
 術すべは無きことか、と頼母たのもしき人々に、一つ談話ぼなしにするなれど、聞
 くもの誰まことも信とせず。思い詰めて警察へ訴え出でし事もあれど、
 狂気の沙汰とて取上げられず。力無く生甲斐さぎなみ無く、漣なみや滋賀県に
 侘わび年月を過すうち、聞なまえく東京に倉瀬とて、弱きを助くる探偵たすけあ
 りと、雲間に高きお姓名なまえの、雁かりたよりの便に聞ゆるにぞ、さらば助を乞
 い申して、下枝等を救わむと、行李こうりそこそこかの地を旅立ち、一お
ととい昨日この地に着きましたあつさが、暑気あたに中りて昨日一日、旅店に病み
 て枕もあがらず。今朝はちと快こころよげ気あつさなるに、警察を尋ねて見ば

やと、宿を出づれば後より一人跟^つけ来る男あり。忘れもせぬ其奴^{そやつ}こそ、得三に使わるる八蔵という悪僕なれば、害心もあらんかと、用心に用心して、この病院の裏手まで来りしに、思えば運の尽^{つき}なりけん。にわか^{はげ}に劇しく腹の痛みて、立つてもいられず大地に僵^{たお}れ、苦しんでいる処へ誰やらん水を持来りて、吞^くましてくるる者のあり。眼も眩^{くら}み夢中にてただ一呼吸^{ひといき}に吞^く干しつ、やや人心地になりたれば、介抱せし人を見るに、別人ならぬ悪僕なり。はつと思うに毒や利きけむ、心身たちまち悩乱して、腸絞^{はらわた}る苦しさにさては毒をば飲^つまされたり。かの探偵に逢うまでは、束の間欲しき玉の緒を、繫^{つな}ぎ止めたや繫^{つな}ぎ止めたやと絶入る心を激まして、幸いここが病院なれば、一心に駈^いけ込みし。その後は存ぜずと、呼^い

吸つきあえず物語りぬ。

三 一寸手懸

泰助は目をしばたたき、「薄命ふしあわせな御方だ、御心配なさるな。請合つてきつと助けてあげます。と真実面おもてあらわに顯るれば、病人は張詰ゆるめたる気も弛ゆるみて、がっくりと弱り行きしが、頻しきりたもとに袂を指さすにぞ、泰助は耳に口、「何です、え、何ぞあるのですか。「下枝の写真。「むむ、それはこれでしょう。先刻僕さつきが取出しました。とかの写真を病人の眼前めさきに翳かぎせば、つくづくと打視うちながめ、「私わたくしと同じ様に、さぞ今では憔悴やつれて、とほろりと涙を泛うかべつつ、「この

面影はありますまいよ。死顔でも見たい、もう一度逢いたい。と
うつつごころ 現 心にいいければ、察し遣りて泰助が、彼の心を激まさんと、
 「氣を丈夫に持つて養生して、ね、翌朝あしたまで眼を塞がずに僕が下
 枝を連れて来るのを御覽なさい。今夜中に助け出して、財産も他
とて手には渡さないから、必ず御案じなさるな。と言語ことばを尽して慰む
 れば、うなず頷くように眼まなこを閉じぬ。

折おもてから外より戸を叩きて、「もう開けましても差支えございま
 せんか。と医師の尋ぬるに泰助は振返りて、「宜よろしい、おはいん
 なさい。と答うれば、戸ひらを排きて、医師とともに、見も知らぬ男
い入り来れり。この男は、みなり扮装、風俗、いなかも田舎漢と見えたるが、日
なまば向眩めつきゆき眼色にて、上眼づかいにきよろつく様、よから不良やからぬ輩と思わ

れたり。

泰助きつ屹と眼を着けて、「お前様さんは何しに來たのだ。問われて醜むくつけ顔くつけき巖丈男の声ばかり悪優しく。「へいへい、お邪魔様申します。ちとお見舞みめえに罷出つんでたんで。「知己ちかづきのお方かね。「いえ、ただ通とおり懸かかつた者でがんすがその方が強えらくお塩梅あんばいの悪い様子、お案じ申して、へい、故意わざと。という声耳に入りたりけん。その男を見て、病人は何か言いたげに唇を震わせしが、あわれ口も利けざりければ、指もて其方そなたを指さし示し、怒り狂う風情にて、重き枕もたを擡もたげしが、どうと倒れて絶入りけり。

今病人に指さされし時、件くだんの男は蒼あおくなりて恐しげに戦慄わななきたり。泰助などに見遁みのがすべき。肚はらの中に。ト思案して、「早く、お

退のきなさい。お前方の入つて来る処ではありません。と極きめつけられて悄しよげ気かえり、「ああ呼い吸きを引取ましたかい。可愛や可愛や、袖振合うも他生の縁とやら、お念仏申しましょ。と殊勝らしく眼を擦り赤めてやおら病院を退まかんで出ぬ。泰助は医師に向い、「下手人がしらばくれて、（死）をたしかめに来たものらしい。わざと化されて、怪まぬように見せて反あへこべ対に化かしてやった。油断をするに相違ちがひ無い。「いかさま怪しからん人体でした。あのまま見遁して置くお所存つもりですか、「なあにこれから彼奴あいつを突止めるのです。この病人は及ばぬまでも手当を厚くして下さい。誠に可哀相な者ですから。「何か面白い談話はなしがありましたろう。「ちつとも愉おもしろ快くはありませんでした、がこれから面白くなるだろうと思

うのです。追々お談話申しましよう。と帽子を取つて目深に被り、
 戸外へ出づればかの男は、何方へ行きけん影も無し。脱心たりと
 心急立ち、本郷の通へ駈出でて、東西を見渡せば、一町ばかり前
 に立ちて、日蔭を明神坂の方へ、急ぎ足に歩み行く後姿はそ
 の者なれば、遠く離れて見失わじと、裏長屋の近道を潜りて、間
 近く彼奴の後に^{かやつ}出でつ。まずこれで可しと汗を容れて心静かに後
 を^つ跟けて、神田小柳町のとある旅店へ、入りたるを突止めたり。
 泰助も続いて入込み、突然帳場に坐りたる主人に向いて、
 「今の御客は。と問えば、訝かしげに泰助の顔を凝視しが、頼の
 三日月を見て慇懃に会釈して、二階を教え、低声にて、「三番
 室。」

四番室の内に忍びて、泰助は壁に耳、隣室の談話はなしごえ声を聞けば、おのが跟けて来し男の外になお一人の声しけり。

「お前、御苦勞であつた。これで家うちへ歸つても枕を高うして寐ねら

れるというものだ。「旦那もう歸国けえりますか。この二人は主従と見

えたり。「ああしてしまえば東京に用事は無いのだ。今日の終汽しまい

車で歸国かえるとしようよ。「それが宜ようございましょう。そうして御

約束の御褒美は。「家へ行つてから与やる。「間違ませんか。「大

丈夫だ。「きつとでしようね。「ええ、執しつこい拗こいな。「難有ありがてえ、

と無法に大きな声をするにぞ、主人は叱りて、「馬鹿め、人が聞

かあ。後は何を囁ささやくか小声にてちつとも聞えず。少時しばらくして一人

その室まを立出で、泰助の潜みたる、四番室よばんの前を通り行くを、戸

の隙間すきまより覗のぞき見るに、厳格いかめしき紳士にて、年の頃は四十八九、五十にもならんずらん。色浅黒く、武者髯むしやひげ濃く、いかさま悪事は仕かねまじき人物にて、扮装いでたちは絹布おかいこぐるみ、時計の金鎖胸にきらきら、赤城というはこの者ならんと泰助は帳場に行きて、宿帳を検すれば、明あきらかに赤城得三とありけり。(度胸の据った悪党だ、)と泰助は心に思いつ。

四 宵にちらり

三時少し過ぎなれば、終しま汽車にはまだ時間ひまあり。一度ひとたび病院へ取って返して、病人本間の様子を見舞い、身支度して出直さんと

本郷に帰りけるに、早警官等は引取りつ。泰助は医師に逢いて、予後の療治を頼み聞え、病室に行きて見るに、この不幸なる病人は氣息奄々^{えんえん}として死したるごとく、泰助の来れるをも知らざりけるが、時々、「赤城家の秘密……怨めしき得三……恋しき下枝、懐かしき妻、……ああ見たい、逢いたい、」と同じ言を幾たびも^{うわごと}譚言に謂うを聞きて、よくよく思い詰めたる物と見ゆ。遙々^{はるばる}我を頼みて来し、その心さえ浅からぬに、蝦夷^{えぞ}、松前はともかくも、箱根以東にその様なる怪物^{ばけもの}を棲せ置きては、我が職務の恥辱なり。いで夏の日の眠気覚しに、泰助が片膚^{かたはだ}脱ぎて、悪人儕^{ばら}の毒手の裡^{うち}より、下枝姉妹^{きょうだい}を救うて取らせむ。証拠を探り得ての上ならば、渠等^{かれら}を捕縛は成り難し。まず鎌倉に立越えてと、や

がて時刻になりしかば、終汽車に乗り込みて、日影ようよう傾く頃、相州鎌倉に到着なし、滑川なめりがわの辺ほとりなる八橋楼に投宿して、他所よそながら赤城の様子を聞くに、「妖物屋敷ばけもの、」「不思議の家、」「あるいは「幽霊の棲家すみか、」「などと怪しからぬ名を附して、誰ありて知らざる者無し。

病人が雪の下なる家を出でしは、三年前の事とぞ聞く。あるいは救助すくいの遅くして、下枝等は得三のために既に殺されしにあらざるか、遠くもあらぬ東京に住む身にて、かくまでの大事を知らず、今まで棄置きたる不念ぶねんさよ。もし下枝等の死したらんには、悔いても及ばぬ一世の不覚、我三日月の名折なり。少しも早く探索せむずと雪の下に赴きて、赤城家の門前たたずに佇みつつ云々しかじかと呟つぶやきた

るが、第一回の始まりなり。

この時赤城得三も泰助と同じ終汽車にて、下男を従えて家に帰りつ。表二階にて下男を対手に、晩酌を傾けおりしが、得三何心

無く外を眺め、門前に佇む泰助を、遠目に見附けて太く驚き、

「あッ、飛んだ奴が舞込んだ。と微酔も醒めて蒼くなれば、下

男は何事やらんと外を望み、泰助を見ると齊しく反り返りて、

「旦那々々、あれは先刻病院に居た男だ。と聞いてますます蒼く

なり、「えええ！ それでは何だな。お前を疑う様な挙動があつた

というのは彼奴か。「へい、左様でござい。恐怖え眼をして我

をじろりと見た。「こりや飛んだ事になつて来た。と一方ならず

恐るる様子、「何もそう、顔色を変えて恐怖がる事もありますめ

え。病気で苦しんでる処を介抱してやったといえればそれ迄のことだ。「でもお前が病院へ行つた時には、あの本間の青二才が、まだ呼吸があつたというではないか。「ひくひく動いていましたツけ。「だから、二才の口から当家の秘密を、いつけたに違いない。「だって何程のこともあるめえ。と落着く八蔵。得三は頭を振り、いや、他の奴と違う。ありやお前、倉瀬泰助というて有名な探偵だ。見ろ、あの頬桁の創の痕を。な、三日月形だろう、この界限でちつとでも後暗いことのある者は、あれを知らぬは無いくらいだ。といえれば八蔵はしたり顔にて、「我れも、あの創を目標にして這ツ面を覚えておりますのだ。「むむ、汝はな、これから直ぐに彼奴の後を跟けて何をするか眼を着ける。

「飲のみ込こました。」「実に容易ならぬ檻ぼろ褌ぼろが出た。少しでも脱ぬ心かるが最後、諸ともども共に笠の台が危ないぞ。と警いましむ戒むれば、八蔵は高慢なる顔かおつき色しきにて、「たかが生ちろツ白やい瘦やせた野郎、鬼おに神がみではあるめえ。一思いに捻ひねり潰つぶしてくりよう。と力ちから瘤こぶを叩たたけば、得三はあまたたびこうべ黥あまたたびこうべ度頭どうべを振り、「うんや、汝には対手が過ぎるわ。敏すばしこ捷こい事ア狐の様で、どうして喰くえる代物じゃねえ。しかし隙すきがあつたら殺や害つツちまえ。」

まことや泰助が一期の失策、平常いづものごとく化粧して頬の三日月は塗ぬり抹けし居たれど、極暑の時節なりければ、絵具汗のために流れ落ちて、創あの露らわれしに心着かず、大事の前に運う悪くも悪人の眼に止まりたるなり。

さりとも知らず泰助は、ほぼこの家の要害を認めれば、日の暮れて後忍び入りて内の様子を探らんものをと、踵きびすを返して立去りけり。

表二階よりこれを見て、八蔵は手早く身支度整え、「どれ後を跟けましょう。「くれぐれも脱心ぬかるなよ。「合点がってんだ。と鉄の棒の長さ一尺ばかりにて握太きを小脇に隠し、勝手口より立出たちいでしが、この家は用心嚴重にて、つい近所への出入ではいりにも、鎖じょうを下す掟おきてとかや。心急せきたる折ながら、八蔵は腰なる鍵を取り出いだして、勝手かの戸に外より鎖を下し、急ぎ門前に立出でて、滑川の方へ行く泰助の後より、登あしおと音ひそかに跟け行ゆけども、日は傾きて影も射映ささねば、少しも心着かざりけり。

五 妖怪沙汰

泰助は旅店に歸りて、晩ばんさん餐の前に湯に行きつ。湯殿に懸けた姿見に、ふと我顔の映るを見れば、頬の三日月露あらかわれいたるにぞ、心潜かに驚かれぬ。ざつと流して座敷に歸り、手早く旅行鞆を開きて、小瓶の中より絵具を取出し、好よく顔に彩りて、懐中鏡に映し見れば、我ながらその巧妙たくみなるに感ずるばかり旨々まんまと一皮被かぶりたり。

今夜を過ぎず赤城家に入込みて、大秘密あはを発あきくれん。まずその様子を聞置かんと、手を叩きて亭主を呼べば、気軽てんぼそうな天

保男、とつかわ前に出来りぬ。「御主人外でも無いが、あの雪

の下の赤城という家。と皆まで言わぬに早合点、はやのみこみ「へい、なる

ほど妖物邸。ばけものやしき「その妖物屋敷というのはどういう理窟だい。

「さればお聞きなさいまし。まず御免被つて、と座を進み、「種いろいろ

々不思議がありますので、第一ああいおおきう大な家に、棲すんでいる

者がございませぬ。「空屋かね、「いえ、そこんところが不思議

でござすて。ちゃんと門札も出ておりますが何者が住んでいるのか、それが解りませぬ。「ふふむ、余り人が出で入はいりをしないのか。

「時々、あの辺で今まで見た事の無い婆ばあさん様に逢うものがあるがござい

ますが、何でも安達あだちが原の一ツ家の婆ばあ々という、それはそれは凄

い人にんてい体だそうで、これは多分山猫の妖精ばけものだろうという風説うわさで

な。「それじゃあ風の吹く晩には、糸を繰る音が聞えるだろうか。

「そこまでは存じませんが、折節女の、ひい、ひい、と悲鳴を上げる声が聞えたり、男がげらげらと笑う声があったり、や、も、散々な妖ばけはら原だといえます。とこれを聞きて泰助は乗出して、

「ほんとなら奇怪な話だ。まずお茶でも一ツ……という一眼小僧は出ないかね。とさも聞惚ききとれたる風を装おい、愉快おもしろげに問いか

くれば、こは怪談の御意に叶いしことと亭主は頻しきりに乗地のりじとなり、

「いえ世がこの通り開けましたで、そういう甘口な妖ばけかた方はいたはいた

しません。東京の何とやら館の壮士が、大勢でこの前さきの寺へ避暑

に来てでございますが、その風説うわさを聞いて、一番妖物退治をして

やろうというので、小雨の降る夜二人連で出掛けました。草ぼう

ぼうと茂った庭へ入り込んで、がさがさ騒いだと思し召せ。ずど
 んずどんとどこかで短銃ピストルの音がしたので、真蒼まつさおになつて遁にげ
 て帰ると、朋輩のお方が。そりや大方天狗てんぐが嚏くさみをしたのか、そう
 でなければ三ツ目入道が屍ひを放つた音だろう。誰だれ某それは屁玉へだまを喰くら
 つて凹んだと大きに笑われたそうで、もう懲こりこり々々して、誰も手出
 しは致しません、何と、短銃では、岩見重太郎宮本の武蔵でも叶
 いますまい。と渋茶を一杯。舌を濡ことばして言を継ぎ、「串じょうだん 戯は
 せて置き、まだまだ気味の悪いのは。と声を低くし、「幽霊れこが出
 ますので。こは聞きき 処どころと泰助は、「人、まさか幽霊が。とわざ
 といえは亭主は至極真面目になり、「いいえ、人から聞いたので
 はございません。わたくし私わたしがたしかに見ました。「はてな。「思い出す

と戦慄ぞつといたします。と薄気味悪うしろげに後を見返り、「部室へやの外が直ぐ森なので、風通しは宜ようございますが、こんな時には、ちとどうも、と座敷の四隅に目を配りぬ。

泰助は思い当る事あれば、なおも聞かんと亭主に向い、「談はなしてお聞かせなさい、実に怪談が好物だ。「余り陰気な談をしますと是非魔まが魅さすといえますから。と逡巡しりごみすれば、「馬鹿なことを、と笑われて、「それでは燈ひを点ともして懸かりましょう。暗くなりました。「怪談は暗あかりに限るよ。「ええ！ 仕方ありません。先月の半ば頃あるひ一日晩方の事……」

この時座敷しん寂として由井が浜風陰々たり。障子の棧しんも見えずなり、天井は墨のごとく四隅は暗く物もの凄すごく、人の顔のみようよう

灰ほのめき、逢魔あうまが時とぞなりにける。亭主はいよいよ心臆おくし、団扇うちわにてはたはたと、腰あたりの辺あおを煽あおぎ立て、景氣を附けて語りけるは、
 「ちようどこの時分用事あつて、雪の下を通りかかり、かねて評判かんぼしが高いので、怯びく気びく々々もので歩いて行くと、甲かんぼし走はしった婦人おんなの悲鳴ひびきが、青照山せうしやまの笥こたまに響こたいて……きい——きいつ。「ああ、嫌いや否やな声だ。「は——我ながら何ともいえぬ異変な声でございます。
 と泰助と顔を見合せ、亭主は膝ひざもと下までひたと摺すり寄り、「ええそれが私わたくしは襟許えりごから、氷を浴びたような気が致して、釘附かぎづにされたように立止たつて見みました。有あり様ようは腰こしががくついて歩ある行ゆけませなんだので。すると貴客あなた、赤城あかぎの高楼たかどのの北きたの方かたの小こさな窓まどから、ぬうと出たのは婦人おんなの顔かほ、色真ま蒼さおで頬ほッつぺたた面おもては消きえて無ないとい

うほど瘠やせつこけて、髪かみの毛けがこれからこれへ（ト仕方をして）こ
ういう風かぜ、ぱつちり開あいた眼まなこが、ぴかりしたかと思うと、魂たまぎ消き
た声こゑで、助たすけて——助たすけて——と叫こゝろびました。」

語るを聞いて泰助は心こゝろの中に思おもうよう、いかさま得え三さんに苛か責やく
されて、下枝したえだかあるいは妹いもうとか、さることもあらむかし。活な命ながらえて

だにあるならば、おツつけ救すくい得えさせむむずと、漫そぞろに憐あわれを催もよほしぬ。

談話途切はなしれて宿しゆくの亭主ていしゆは、一服吸すわんと暗くら中がらを、手探てらりに、煙き
管せを捜たずして、「おや、変へんだ。ここに置おいた煙管せんくわんが見みえぬ。あれ、

魔ま隠かく、気味きみの悪わるい。となおそここを見廻みまわせしが、何者なにものをか見た
りけむ。わつと叫こゝろぶに泰助たいすけも驚おどきて、見遣みまる座敷ざしきの入口いりぐちに、煙けの
ごとき物もの体たいあつて、朦朧もうろうとして漂たえり。あれはと認ひまむる隙ひまも無な

く、い^{いな}な^ずま^ま電？ ふつと暗^{やみ}中に消え、やがて泰助の面前に白き女の顔^あら^わ頭^われ、拭^{ぬぐ}いたらむ様にまた消えて、障子にさばく乱髪^{らんぱつ}のさらさらという音あり。

六 乱れ髪

亭主の叫びし声を怪しみ、慌^{あわ}た^だしく来る旅店の内儀、「まあ何事
でござんすの、と洋燈^{ランプ}を点^つけて据え置きながら、床の間の方を見
るや否や、「ン、と反^{そり}返^{かえ}るを抱き止めて、泰助^{きつ}屹と振返れば、
柱隠しの姿絵という風情にて、床柱に凭^{もた}れて立つ、あら怪しき婦^お
人^{んな}ありけり。

つくづくその婦人を見るに、年は二十二三なるべし。しおしお
 とある白地の浴衣の、処々裂け破れて肩や腰の辺には、見るもい
 ぶせき血の汚点たるを、乱次無く打纏い、衣紋開きて帯も占め
 ず、紅のくけ紐を胸高に結びなし、脛も頭わに取乱せり。露垂る
 ばかりの黒髪は、ふさふさと肩に溢れて、柳の腰に纏いたり。膚
 の色真白く、透通るほど清らかにて、顔は太く蒼みて見ゆ。ただ
 屹としたる品格ありて眼の光凄まじく、頬の肉落ち頤細りて薄衣
 の上より肩の骨の、いたいたしげに顕われたるは世に在る人とは
 思われず。強き光に打たれなば、消えもやせんと見えけるが、今
 泰助等を見たりし時、物をも言わで莞爾と白齒を見せて笑める様
 は、身の毛も弥立つばかりなり。

人々ものを言いかくれど、答は無くて、ただにこにこと笑うを見て、始め泰助は近隣の狂女ならんと見て取りつ、問えばさるものは無しという。今もなお懐中せる今朝の写真に心附けば、憔悴果ててその面影は無けれども、気ばかり肖たる処あり。さては下枝のいかにしてか脱け出でて来しものにはあらずや。日夜折檻をせらるると聞けば、責苦にや疲れけん、呼吸も苦しげに見ゆるぞかし。こはこのままに去し難しと、泰助は亭主に打向い、「どこか閑静な処へ寝さして、まあまあ気を落着かしてやるが可い。当家へ入つて来たのも、何かの縁であろうからと、勧むれば、亭主は気の好き男にて、一議も無く承引なし、「向側の行当の部屋は、窓の外がすぐ墓原なので、お客がございませんから、幽霊

できえなけりや、それへ連れて行つて介抱してつかわしましょう。
 といいつつ女房を見返りて、「おい、御女中をお連れ申して進ぜ
 なさいと、命いつけられて内儀は恐こわ々ごわ手を曳ひいて導けば、怪しき
 婦人は逆らわず、素直に夫婦に従いて、さもその情を謝するがご
 とく秋波斜めに泰助を見返り見返り、蹠よろ跟よろとして出行きぬ。

おもて
 面にべつたり蜘蛛くもの巣を撫な払はいて、縁の下より這はい出いづるは、

九太夫にはちと男が好過ぎる赤城の下男八蔵なり。かれ先刻さきに泰助
 の後を跟け来りて、この座敷の縁の下に潜みており、散々やぶか藪蚊やぶかに
 責められながら、疼痛いたみを堪こらうる天あつ晴ばれ豪傑、かくてあるうち黄昏たそが
 れて、森の中暗うなりつる頃、白衣を着けたる一人の婦人、樹の
 下蔭あらかわに顯あられ出でつ、やおら歩あゆみを運みばして、雨戸は繰らぬ縁側へ、

忍びやかに上りけるを、八蔵おぼろげ臙ひとま氣に見てもしやそれ、はてよく肖た婦人おんなもあるものだ、下枝は一室ひとまに閉込めあれば、出て来らるべき道理は無きが、となおも様子を聞きいるに、頭の上なる座敷には、人の立騒ぐけはい氣勢あり。幽霊などと動揺どよめきしがようやくに静まりて、彼方あなたへ連れ行き介抱せんと、誘いざない行きしを聞澄まし、縁の下よりぬつと出で蚊を払いつつ渋面つくり、下枝ならむには一大事、とくと見届けてせむ様あり、と裏手の方の墓原ひそかへ潜ひそかに忍び行きたりける。

座敷には泰助が、怪しき婦人を見送りて、下枝の写真を取出し、ランプ洋燈に照して彼とこれと見競べている処へ、亭主は再び入来りて、「お客様、寢床を敷いてやりますと、僵たおれる様ふせに臥ふりました。何

だか不便ふびんな婦人おんなでございます。「それは深切おんじに好くしておやんな
 すつた。そうして何とか言いましたかい。「あれは唾おとしじゃないか
 と思われます。何を言つても聞えぬようすでございます。「何なんし
 ろ談話はなしの種かたになりそうだね。「いかさまな。「で、私はこれから
 ちよいと行つて来る処ところがある。御当おうち家へ迷惑まごは懸かないから、帰る
 までああして蔵かくま匿かくて置いて下さらないか、衣服きものに血ちが附つてたり、
 おどおどしている処ところを見ると、邪じや慳けんな姑しゅうにいびられる嫁よめか。
 「なるほど。「あるいは継母けいぼに苦しめられる娘むすめか。「勾かど引ひされ
 た女むすめで、女郎ぢやうらうにでもなれと責められるのか。こりや、もしよくあ
 るやつでございませう。「うむその辺あたりだろう。何でも日い附わくつきに
 違ちがいないから、御亭主おとこぎ、一番いちばん侠客やくざ気きを出しなさい。「はあて、よ

うござえさあ、ほい、直ぐとその気になる。ははははは。かか
 らんには後に懸念無し。亭主もし二の足ふまば我が職掌をいうべ
 きなれど、蔵匿うことを承知したればそれにも及ばず都合可し。よ
 人情なればこの婦人を勦りてやる筈なれど、大犯罪人前にあり、
 これ忽ゆるがせにすべからずと、泰助は急ぎ身支度して、雪の下へと出行
 きぬ。赤城の下男八蔵は、墓原に来て突つきあたり当の部屋の前に、呼
 吸きを殺していたりしが、他の者は皆立去りて、怪しと思おんなう婦人の
 み居残りたる様子なれば、倒れたる墓石を押し寄せて、その上に
 乗りて伸び上り、窓の戸を細う開きて差さ覗しのぞけば、かの婦人は此
 方なたを向きて横様に枕したれば、顔も姿もよく見えたり。「やあ！

と驚きの余り八蔵は、思わず声を立てけるにぞ、婦人は少し枕

を上げて、窓をあおぎ見たる時、八蔵ぬつと顔差出し、拳に婦人を掴む真似して、「汝、これだぞ、と睨めつくれば、連理引きに引かれたらむように、婦人は跳ね起きて打戦き、諸袖に顔を隠し、俯伏になりて、「あれえ。」

七 籠の匣

倉瀬泰助は旅店を出でて、雪の下への道すがら、一叢樹立の茂りたる林の中へ行懸りぬ。月いと清うさしいでて、葉裏を透して照らすにぞ、偶然思付く頬の三日月、また露れはせざるかと、懐中鏡を取^{とりいだ}出せば、きらりと輝く照魔鏡に怪しき人影映り

けるにぞ、はつと鏡を取落せり。

とたんに鉄棒空くうに躍こつて頭こうべを目懸まけて曳えい！ と下す。さしつたりと身を交せば、狙ねらい外はずれて発奮はつみを打ち路傍の岩を真まつふたた。石鉄かつせん戛せん然火花を散らしぬ。こはかの悪僕八蔵が、泰助に尾し来りて、十分油断したるを計り、狙ねらいうち撃うちしたりしなり。僥倖さいわいに鏡を見る時、後に近ちかづく接曲者映りて、さてはと用心したればこそ身を全うし得たるなれ。

「しまった。と叫びて八蔵が、鉄棒を押おつとり取直すを、泰助ははつたと睨め付け、「御用だ。と大喝一声、怯ひるむ処を附け入つて、拳こぶしの雷手鍊いなずまのあてに、八蔵は急所を撲うたれ、踏反ふんぞりて、大地はどうと響きけり。

「月夜に暗殺、馬鹿々々しい、と打笑いつつ泰助は曲者の顔を視^{なが}めて、「おや、此奴^{こやつ}は病院へ来た奴だ。赤城の手下に違いないが、ふむ敵はもう我^{おれ}が来たことを知ってるな。こりや油断がならぬわい。危険^{けんのんけん}々々、ほんのひといき機^{ひといき}でこの石の通りになる処、馬鹿力の強い奴だ。と舌を巻きしが、「待て、何ぞ手懸りになる様な、掘出し物があるうかも知れぬ。とかかる折にも油断無く八蔵の身^か体^{からだ}を検して腰に附けたる鍵を奪いぬ。時に取りては千金にも勝りたる獲物ぞかし。これあらば赤城家へ入^{いりこ}込^{たより}むに便^{しあわせよし}あり造化^{しあわせよし}至^し造^せ妙^{せう}と莞爾^{にっこう}と頷^{うなず}き、袂^{たもと}に納めて後をも見^{ひき}ず比^{ひき}企^{やっ}が谷の森を過ぎ、大町通つて小町を越し、坐禅川を打渡つて——急ぎ候ほどに、雪の下にぞ着きにける。

(談話前にもどる。)

ここに赤城得三は探偵の様子を窺えとて八蔵を出し遣りたる後、
 穩かならぬ顔色にて急がわしく座を立ちて、二室三室通り抜けて
 一室の内へ入り行きぬ。こは六畳ばかりの座敷にて一方に日蔽
 の幕を垂れたり。三方に壁を塗りて、六尺の開戸あり。床の間
 は一間の板敷なるが懸軸も無く花瓶も無し。ただ床の中央に他に
 類無き置物ありけり。鎌倉時代の上藁にや、小挂しやんと
 着こなして、練衣の被を深く被りたる、人の大ききの立姿。溢
 るる黒髪小袖の褌、色も香もある人形なり。言わぬ高峰の花なれ
 ば、手折るべくもあらざれど、被の雲を押分けて月の面影洩出で
 なば、藁長けたらんといと床し。

得三は人形の前に衝と進みて、どれ、ちよつと。上臈の被を引
 き上げて、手燭を翳して打見遣り、「むむ可々。と独言。
 旧のごとく被を下して、「後刻に高田が来る筈だから、この方は
 あれにくれてやって、金にするとしてまず可しと。ところで下枝
 の方は、我れが女房にして、公債や鉄道株、ありたけの財産を、
 我れが名に書き替えてト大分旨い仕事だな。しかし、下枝めがま
 た悪く強情で始末におえねえ。手を替え、品を替え、撫つ抓りつ
 して口説いても応と言わないが、東京へ行懸けに、梁に釣して死
 ぬ様な目に逢わせて置いたから、ちつとは応えたらう。それに本
 間の死んだことも聞かしてやったら、十に九つはこつちの物だ。
 どうやら探偵が嗅ぎ附けたらしい。何もかも今夜中に仕上げぎな

るめえ。その代り翌日あしたツから御大尽だ。どれ、ちよびと隠かくし妻づまの顔を見て慰もうか。とかねてより下枝を幽閉せる、座敷牢へ赴くとて、廻廊に廻り出でて、欄干に凭よりかかれば、ここはこれ赤城家第一の高楼たかどのにて、屈曲縦横の往来を由井が浜まで見通しの鎌倉半面は眼下にあり。

山の端はに月の出いでしお汐見るともなく、比企が谷の森かたの方を眺むれば、目も遙かなる畦道あぜみちに、朦朧もうろうとして婦人おんなあり。黒髪さつ颯と夜風に乱して白き衣服きものを着けたるが、月明りにて画えがけるごとく、南をさして歩むがごとし。

得三は啊呀あなやと驚き、「あれはたしかに下枝の姿だ……いや、いや、三年このかた以来、あの堅固な牢の内へぶちこんであるものを、ま

さか魔術を使いはしめえし、戸外へ脱けて出る道理が無い。こり
 や心の迷いだ。脱がしてはならぬ脱がしてはならぬと思つてるか
 らだ。こればかりの事に神経を悩すとは、ええ、意気地の無い事
 だ。いかさまな、五十の坂へ踏懸けちやあ、ちと縫よりが戻ろうかい。
 だが油断はならない、早く行つて見て安心しよう。何、居るに違
 いないが……ままよ念のためだと、急がわしく、馳はせ行きて北の
 台と名づけたる高樓の、怪しげなる戸口に到り、合鍵にて戸を開
 けば、雷らいのごとき音ありて、鉄張の戸は左右に開あきぬ。室内に籠
 りたる生なまぬる暖き風むんむと面おもてを撲うちて不こころわる快きこといわん方無
 し。

手燭に照して見廻みまわせば、地に歸しけん天に朝しけん、よもや

よもやと思いたる下枝は消えてあらざりけり。得三は顛倒して
ちまなこ血眼になりぬ。

八 幻影

先刻さきに赤城得三が、人形室いを出行いできたる少しば時らく後に、不思議な
 ることこそ起りたれ。風も無きに人形の被か揺ずめき落ちて、妖あ麗で
 なる顔の洩もれ出でぬ。瑠璃るのごとき眼も動くようなりしが、怪し
 いかな影法師のごとき美人静々と室まの中うちに歩み出でたり。この幻ま
ぼろしたと影ぼ譬ろえば月夜に水を這はう煙けに似ぶりて、手にも取られぬ風情なりき。
 折から畳障りの荒らかなる、躰あ音し彼方おとかなたに起りぬれば、黒き髪

と白き顔はふつと消え失せ、人形はまた旧の通り被を被りぬ。

途端にがたひしと戸を開けて、得三は血眼に、この室に駈け込み、「この方はどうだろう。あの様子では同じく翼が生えて飛出したかも知れぬ。さあ事だ、事だ、飛んだ事だ。もう一度見ねばならない。と小洋燈の心を繰上げて、荒々しく人形の被をめくり、とくと覗きて旧のように被を下ろし、「うむ、この方は何も別条は無い。やれこれで少しは安堵だ。それにしても下枝めはどうして失せた知らん。婆々が裏切をしたのではあるまいか。むむ、何しろ一番糺明て見ようと、掌を高く打鳴らせば、ややありて得三の面前に平伏したるは、当家に飼殺しの飯炊にて、お録といえる老婆なり。

得三は声鋭く、「お録、下枝をどこへ遁にがした。と睨ねめつ附つくれば、老婆は驚きたる顔を上げ、「へい、下枝様さんがどうかありませんか、」「しらばくれない。きつと汝きさまが遁にがしたんだ。「いいえ、一向に存じません。「汝うぬ、言いつちまえ。「ちつとも存じません。「ようし、白状しなけりやこうするぞ。と懐中より装弾たまごめしたる短銃ピストルを取い出し、「打殺ぶちころすが可いか。とお録の心前むなさきに突附つくれば、足下うずくまに踞すりて、「何でそんな事をいたしましたしやう。旦那様が東京へいらつしやつてお留守の間も私わたくしはちやんと下枝様の番をしておりました。繩は解といてやりましたけれども。「それ見ろ。そういう糞慈悲おれを垂たれやあがる。我が帰かへるまで応うむといわなけりや、決けして下くだしてやることはならないと、あれほど言置いて行いつたじ

やないか。「でもひいひい泣きまして耳の遠い私でも寝られませ
んし、それに主公あなた、二日もああして梁うつぱりに釣上げて置いちやあ死ん
でしまうじやございせんか。「ええ！ そんなことはどうでも
可い。どこへ遁したか、それを言えツてんだ。「つい今の前さきも北
の台へ見廻りに参りましたら、下枝様は平常いつもの通り、牢の内に僵たお
れていましたのに、にわかいに居なくなつたとおつしやるが、実まことと
は思われません。と言い解い様の我あざむを欺あざむくとも思われねば、得三は
疑い惑い、さあらんには今しがた畦あぜみち道みちを走りし婦人おんなこそ、籠かごを
脱けたる小鳥ならめ、下枝一たび世いに出いなば悪事の露頭は瞬く間
と、おのが罪くちなわに責められて、得三の気味の悪さ。惨むじたらしゆう殺
したる、蛇くちなわの鎌首ばかり、飛失せたらむ心地しつ立つても居ても

落着かねば、いざうれ後を追懸けて、草を分けて探し出し、引摺ひきずつて帰らんとお録に後を頼み置き、勝手口より出でんとして、押せども、引けども戸は開かず。「八蔵の馬鹿！ 外から鎖じょうを下して行く奴があるもんか。とむかばらたちの八ツ当り。

折から玄関の戸を叩きて、「頼む、頼む。と音訪おとなう者あり。聞覚えのある声はそれ、とお録内より戸を開けば、外おもてよりずっと入るは下男を連れたる紳士なりけり。こは高田たかただ駄平だへいとて、横浜に住める高利貸にて、得三とは同気相集る別懇の間柄なれば、非義非道をもつて有名なだかく、人の活血いきちを火吸器すいふくべと渾名あだなのある男なり。召連れたる下男は銀平という、高田が気に入りの人非人。いずれも法衣ころもを絡まといたる狼ぞかし。

高田は得三を見て声をかけ、「赤城様さん、今晚は。得三は出迎いでむか

えて、「これは高田様さんでございますか。まあ、こちらへ。と二階

なる密室に導きて主客三人みたりの座は定まりぬ。高田は笑ましげに巻ま

きたばこきたばこを吹して、「早速ながら、何は、令嬢は息災かね。「ええ、

お藤の事でございますか、「左様さ、私の情婦いいひと、はははははは。

と溶解とろけんばかりの顔色かおつきを、銀平は覗のぞきて追つい従しよう笑い、「ひ

ひひひ。得三は苦笑いして、「藤は変った事はございませぬ。御

約束通り、今夜貴下に差進さしあげるが。……実は下枝ね。「ははあ。

「あれが飛んだことになりました。「ふむ、死にましたろう。だ

から言わないことか、あんなに惨むじいことをなさるなど。とうとう

責殺したね。非道ひどいことをしなすつた。「いえ、死んだのならまだ

しも可いが、どうしてか逃げました。「なに！ 遁にげたえ？」それで今捜しに出ようというところですよ。「むむ、それはとんだ事だ。猶予をしちや不可いけません。あの嬢こが饒しゃべ舌ると一切の事が発ば覚れつちまう。宜しい銀平にお任せなさい。のう、銀平や、お前はそういうことには馴なれているから、取急いで探しておあげ申しなと命いくれれば得三も、探偵うかがに窺うわることを知りたれば、家を出でむは気懸りなりしに、これ幸さいわいと銀平に、「じゃ御苦労だが、願います。私どもは後にちつと用事があるから。といえは、もとよりひとつあなむじな」

同 穴あなの貉むじなにて、すべてのことを知るものなれば、銀平は領うなずきで、「へい宜しゅうございます。下枝様がああみなりい扮装みなりのまま飛出したのなら、今頃は鎌倉中の評判になつてに違いありません。

何をいおうと狂きちがい氣にして引張ひっぱつて参ります。血だらけのあの姿
 じゃ誰だつて狂氣きちがいということひつぱを疑いませぬ。旦那、左様なら、こ
 れから直ぐに。と立上るを得三しばしは少時と押し止め、「例のな、承知
 でもあるうが、三日月探偵がこつちへ来ているから、油断のない
 ように。と念を入れるれば、「それは重々容易ならぬことだ。銀平
 しつかりやつてくんことばな。と高田も言を添えにける。銀平とんと胸
 を叩きて、「御配慮おきづかいなされますな。と気軽に飛出し、表門の前
 を足早ゆきかかに行懸れば、前途むこうより年少わかき好男子の此方こなたに來懸るには
 たと行逢いけり。擦違すりあうて兩人ふたり齊ひとしく振返り、月つき明あかりに顔を見
 合あいしが、見も知らぬ男なれば、銀平はそのまま歩を移しぬ。こ
 れぞ倉瀬泰助が、悪僕八蔵を打倒して、今しもここに來れるなり

き。

九 破廂

泰助は昼来て要害を見知りたれば、その足にて直ぐと赤城家の裏手に行き、垣の破目やれめを潜りて庭に入りぬ。

目も及ばざる広庭の荒たきままに荒果てて、老松ろうしやうこさん古杉こさん蔭暗く、花無き草ども生茂りて踏むべき路みちも分難わけがたし、崩れたる築山あり。水の洞かれたる泉水あり。倒れかけたる祠ほこらには狐や宿を藉かりぬらん、耳みみもと許もと近き木の枝にのりすれのりすれ梟ふくろうの鳴き連るる声いと凄すさまじ、木の葉を渡る風はあれど、塵ちりを清はむる箒はき無ければ、

蜘蛛の巣ばかり時を得顔に、霞を織る様哀なり。妖物屋敷と言合えるも、道理なりと泰助が、腕拱きてイミたる、頭上の松の茂を潜りて天より颯と射下す物あり、足許にはたと落ちぬ、何やらんと拾い見るに、白き衣切きぬぎれのようなものに、礫を一つ包みてありけり。押開きて月に翳せば、鮮々しき血汐にて左の文字を認めたり。

なぶりごころし

虐殺にされようとする女が書きました。どうぞ、この家の内から助け出して下さいまし。……書様の乱れたる字の形の崩れたる、筆にて運びし物にはあらし。思うに指など喰い切りてその血をその手ににじり書き、句の終りには夥しく血のぬらぬらと流れたるを見て、泰助はほろりと落涙せり。

これを投げたるは、下枝か、藤か。目も当てられぬことどもかな。いで我来れり、泰助あり、今夜の中に地獄より救い取りて、明日はこの世に出し参らせむ。そもいづくより擲ちたらんと高たかど楼のを打仰げど、それかと見ゆる影も無く、森々と松吹く風も、助けを呼びて悲しげなり。屹きつと心を取直し、丈に伸びたる夏草を露けき袖にて押分け押分けなお奥深く踏入りて忍び込むべき処もやと、彼方あなたこなた此方へめぐを経歴るに、驚くばかり広大なる建物の内に、住む人少なければ、燈の影も外へ洩れず。破やれびさし廂より照射さしい入る月は、崩れし壁の骨を照して、家内寂寞せきばくとして墓に似たり。ややありて泰助は、表門かたの方に出で、玄関に立向い、戸を推して試むれば、固く内より鎖とぎして開かず。勝手口と覺しき処に行きて、も

しやと引けども同じく開かず。いかにせんと思ひしが、ふと錠前に眼を着くれば、こは外より鎖せしなり。試みに袂たもとを探りて、悪僕より奪い置きたる鍵を嵌はむれば、きしと合いたる天の賜物たまもの、

「占めた。」と捻ねじれば開ひらくにぞ、得たりと内へ忍び入りぬ。

暗闇を歩むに馴なれたれば、爪先探りに跫あしおと音を立てず。やがて

壇階だんばしご子を探り当て、「これで、まず、仕事に一足踏懸けた。と

耳を澄まして窺うかがえど、人の氣附たる様子も無ければ、心安しと二

階に上りて、壁を洩れ来る月影に四辺あたりを屹と見渡せば、長き廊下

の両側に比々として部屋並べり。大方は雨漏に朽ち腐れて、柱ば

かり参差しんしと立ち、畳は破れ天井裂け、戸障子も無き部屋どもの、

昔はさこそと俤しのばるるがひい二ふウ三みいと数たうるに勝たえず。遥はるか彼

方に戸を閉じたる一室ありて、燈火の灯影幽かに見ゆるにぞ、要こそあれと近附きて、ひたと耳をあてて聞くに、人のあるべき氣勢もなければ、潜かに戸を推して入込みたる、此室ぞかの人形を置ける室なる。

垂れ下したる日蔽は、これ究竟の隠所と、泰助は雨戸とその幕の間に、電のごとく身を隠しつ。と見れば正面の板床に、世に希有しき人形あり。人形の前に坐りたる、十七八の美人ありけり。

泰助は呼吸を殺してその様を窺えば、美人は何やらむ深く思い沈みたる風情にて、頭を低れて傍目もふらず、今泰助の入りたることは少しも心附かざりき。額襟許清らに見え、色いと白く肉置

き好^よく、髪房やかに結いたるが、妖^{あで}艶^{やか}なることはいわむ方無し。
 美人は正坐に堪えざりけん、居^{いずま}坐^ま乱^いして泣きくずおれ^{すす}啜^すり上げ
 つつ^{つぶやく}独言^{やく}よう、「ああ悪人の手に落ちて、遁^にげて出ることとは出来
 ず、助けて下さる人は無し。あの高田に汚^{けが}されぬ先に、いつそこ
 のまま死にたいなあ、お姉^{あねさん}様はどう遊ばしたかしら、定めし私
 と同じ様に。と横に倒れて唯^{ひた}泣^{なき}に泣きけるが、力無げに起直り
 赤めたる眼を袖にて押^{おしぬぐ}拭^{ぬぐ}いて、件^{くだん}の人形に打向い、「人形や、
 よくお聞き。お前はね、死^{おな}亡^{なく}遊^{なり}ばした母^{おつかさん}様に、よく顔が
 肖^にておいでだから、平常^{いっ}姉^{ねえ}様と二人して、可愛がつてあげたのに、
 今こんな身になっているのを、見ていながら、助けてくれないの
 は情ないねえ、怨めしいよ。御覽な、誰も世話をしないから、こ

の暑いのに綿の入った衣服きものを着ておいでだよ。私を旧もとのよう
 ておくれだったら、甘味おいしい御膳ごぜんも進あげようし、衣服も着換えさせ
 ますよ。お前のに綺麗な衣服を、姉様と二人で縫い上げて、翌日あす
 は着せてあげようと楽しみにして寝た晩から、あの邪じやくん慳けんな得三に、
 こうされたのはよく御存じでないかい。今夜は高田に恥かしめら
 れるからさあ、どうかして下さいばよう。ええ、これほどいう
 のに返事もしないかねえ。とひしと上臈の腰すがに縋すがりて、口説きた
 るには、泰助も涙ぐみぬ。

美人はまた、「あれ堪忍して下さいませしよ。貴女あなたは仮おつかにも母
 様さん、恨みがましいことを申して済みませんでした。でももう神
 様も、仏様も、妾わたしを助けて下さらないから、母様どうぞ助けて下

さい。そうでなくば、私を殺して早うお傍そばに連れて行って下さいまし、よ、よ。と力一杯抱だきし緊めて、身を震わせば人形もともにわななくごとくなり。

泰助は見るに忍びず。いでまずこの嬢こを救い出いださん、家の案内は心得たれば背負うて遁げんに雑作は無しと幕を掲げて衝つと出でたり。不意に驚き、「あれ。と叫びて、泰助声をも懸けざるに、身を翻ひるがえして、人形の被かざきを潜くぐつて入るよと見えし、美人は消えて見えずなりぬ。あまりの不思議に呆気に取りられ、茫然として眼をぱちぱち、「不思議だ。不思議と泰助は、潜かに人形の被の端へ片手を懸けたる折こそあれ。部室へやの外おもてにどやどやと登あしおと音して、二人が来れる様子に、南無三宝飛び退すきりて再び日蔽の影に潜みぬ。

十 夫婦喧嘩

高田の下男銀平は、下枝を捜し出さんとて、西へ東へ彷徨つ。
 巷ちまたうわさの風説そばだに耳そばだを聳そばだて、道行く人にもそれとはなく問試ゆむれど手懸り無し。南を指して走りしと得三の言いたれば、長谷はせの方かたに行きて見んと覚おぼつか束おぼつかのうは思えども、比企が谷より滑川へ道を取つて行懸り、森の中を通るとき、木の根を枕くさむらに叢くさむらに打倒れたる者を見たり。

時すから悪やまいき病疾かかに罹かかれるやらむ、近寄りては面倒、と慈悲心無なき男ななれば遠くより素通りしつ。ましてしばし人を尋ぬる身にし

あれば、人の形をなしたる物は、何まれ心を注くべきなり。と思
い返して傍そばに寄り、倒れし男の面体を月影にてよく見れば、かね
て知ちかづ己きなる八蔵の齒を喰くい切しりて呼吸絶えたるなり。銀平これ
はと打驚き、脈を押えて候うかがえば遙かすかに通う虫の呼吸、呼び活けん
と声を張上げ、「八蔵、やい八蔵、どうしたどうした、え、八蔵
ツ、と力任せに二つ三つ 掴にぎり拳こぶしを撲くらわせたるが、死活の法にや
協かないけん。うむと唸うめくに力を得て「やい、しつかりしろ。と励ま
せば、八蔵はようように、脾腹ひばらを抱えて起上り、「あ痛いた、あ痛。
……おお痛え、痛え、畜生非道ひどいことをしやあがる。と渋面つく
りて銀平の顔を視ながめ、「銀平、遅かつたわやい。「おらあすんで
の事で俗名八蔵と拝もうとした。「ええ、縁起でもねえ廃止よしてく

れ。物をいうたびに腹へこたえて、こてえられねえ。「全体どうしたんだ。八蔵は頭を搔き搔きありし事ども物語れば、銀平は、驚きつまた便たよりを得つ、「ふむ、それでは下枝は滑川の八橋楼に居るんだな。「ああ、どうしてか紛れ込んだ。おらあ、窓から覗のぞいてたしかに見た。何とか工夫をして引摺り出そうと思ってる内に、泰助めが出懸ける様だから、早速跡を跟つけて、まんまと首尾よくぶつちめる処を、さんざんにぶつちめられたのだ。忌々いめえましい。「可よし一所に歩べ。行つて下枝を連れて帰けえろう。「おっと心得た。「さあ行ゆこうぜ。「参りまする参りまする。何かと申すうちに、はやここは滑川にぞ着きにける。

八橋楼の亭主得右衛門は、黄昏時たそがれどきの混雑に紛れ込みたる怪し

き婦人を、一室ひとまの内に寝やすませおき、心を静めさせんため、傍へは
 人を近附たけず。時経たたば素性履歴を聞きただ糺し、身に叶うべきほど
 ならば、力となりて得させむず、と性うまれつき質つぎたる好こ事心。こうし
 てああしてこうして、と独りほくほく領うなずきて、帳場に坐りて脂やにさ
が下り、婦人を窺うかがう曲者などの、万もし一入いり来きたることもやあらむと、
 内外に心を配りいる。

勝手を働しく女房が、用事し了しうて襷たすきを外きし、前まえ垂だにて手を拭き
 拭き、得衛の前へとんと坐り、「お前様さんどうなさる気だえ。「ど
 うするつて何をどうする。と空とぼければ擦寄すりよつて、「何をもな
 いもんだよ。分別盛りの好こい年をして、という顔色たの尋常たならぬ
 に得右衛門は打笑うちわらい、「其方そなたもいけ年としを仕つかまつてやくな。といえは

赫かつとなり、「氣樂な事をおつしやいますな。お前様見たような人を怪我にも妬やく奴があるものか。「おや恐ろしい。何をそうがみがみいうのだ。「ああいう婦人おんなを宅うちへ置いてどんな懸かかり合あいになろうも知れませぬ。「その事なら放うっちゃ棄ちときな、おれが方寸にある事だ。ちゃんと飲込んでよ。「だッてお前様、御主筋の落人ではあるまいし、世話を焼く事はござりませぬ。「お前こそ世話を焼きなさんな。「いいえ、ああして置くときつと庄屋様からお前を呼びに来て、手詰の応対ななつ、寅刻を合図に首討つて渡せとあります。「その時は例の贖にせくび首びさ。「人を馬鹿にしていらつしやるよ。「そうして娘は居ず、さしずめ身代みがわりにお前さね。「とんでもない。「うんや喜こぼし。「なぜ喜ぶの。「はて、あの綺

麗首の代りにたてば、お前死んでも浮ばれるぜ。「ええ悔しい。

「悔しい事があるものか。首実検に入れ奉る。死相変じてまッそのとおり、はははははは。「お前はなあ。「これ、古風なことをするな。呼吸いきが詰る、これさ。「鶏とりが鳴いても放しはしねえ。早く追い出しておしまいなさい。「水を打懸ぶつかけるぞ。「啖くらい附くぞ。「苦あ、痛、ほんとに啖くいついたな。この狂きちがい女め、と振払う、むしやぶりつくを突飛ばす。がたぴしという物音は皿鉢飛んだ騒動さわぎなり。

外おもてうかがに窺う、八蔵、銀平、時分はよしとぬつと入り、「あい、御免なさいまし。」

十一　みるめ、かぐはな

「はい、光来おいでなさいまし、何ぞ御用。と得右衛門居住い直して挨拶すれば、女房も鬢びんのほつれ毛搔かき上げつつ静まりて控えたり。銀平は八蔵きつに屹めくばと目注おのれせして己おのれはつかつかと入込いりこめば、「それお客様御案内と、得衛の知らせに女房は、「こちらへ。と先に立ち、奥あきまの空室へ銀平を導き行きぬ。道々手筈てはずを定めけむ、八蔵は銀平と知らざる人のごとくに見せ、その身は上あがりくち口くちに腰打懸け、四あ辺たりをきよろきよろ見廻すは、もしや婦人を尋ねにかと得右衛門も油断せず、顔打守りて、「貴方は御泊おとまりではございませんか。と問えばちよつとは答せず、煙草たばこ一服思わせぶり、とんとはたきて

煙管きせるを杖、「親方、逢わしておくんねえ。と異おつにからんで言懸く

れば、それと察して轟とどろく胸を、押鎮めてぐつと落着き、「逢わせ

とはそりや誰に。亭主ならば私じや、さあお目に懸かりましょ。と

此方こなたも負けずに煙草をすばすば。八蔵は肩を動ゆすつてせせら笑い、

「おいらが媽か々かが来ている筈、ちよいと逢おうと思つて来た。

「ふむ、してどんな御婦人だね。「ちと気が狂ふれて血相変り、取

乱してはいるけれど、すらつとして中肉中脊、戦慄ぞつとするほど美

い女さ。と空そらうそぶ 嘯けずねいて毛脛けずねの蚊をびしやりと叩く憎体面にくていづら。か

くてはいよいよかの婦人の身の上思い遣られたり、と得衛きつは屹と

思案して、「それは大方門違わしい、私の代わしになつてから福の神は這は

入つても狂きちがい人などいう者は、門端かどばたへも寄り附きません。と思

いの外の骨の強さ。八蔵は本音を吐き、「おい、可加減いに巫山戯ふておけ。これ知るまいと思つても、先刻さつきちやんと睨にらんでおいた、ここを這入つて右側の突つきあたり当へやの部室の中に匿かくま蔵つてあろうがな。と正面より斬つて懸かれば、ぎよつとはしたれど受流して、「居たらまた何とする。「やい、やい、馬鹿落着おちつくに落着おちつくない。亭主の許かくさぬ女房を蔵かくしておけば姦ま通おとこだ。足許あしもとの明あるい内に、さらけ出してお謝罪わびをしると、居丈高かみに詰寄ひとれば、「こりや可笑おかい、お政府かみに税を差上げて、天下晴れての宿屋なら、他人ひとの妻めかけでも、泊めてはならぬ道理は無い。それとも其方そちの女房ばかりは、泊めるなどいおきてう掟おきてがあるか、さあそれを聞きこうかい。と言いわれて八蔵受身こなたになり、むむ、と詰りて頬脹ふくらし、「何さ、そりや此方こなたの

商売じゃ、泊めたが悪いというではない。用があるから亭主の我
 が連れて帰るに故障はあるまい。といわれて否いやとは言われぬば、
 得衛もぐつと行詰りぬ。八蔵得たりと畳みかけて、「さあ、出し
 て渡してくれ、否と言うが最後だ。とどつかと坐して大胡坐おおあぐら。
 得右衛門思い切つて「居さえすれば渡して進ぜる、居おらぬが実じ
 やで断念あきらめさつし。と言わせも果てず眼を怒らし、「まだまだ吐ぬか
 すか面倒だ。踏み込んで連れて行く、と突立上れば、大手を拵げ、
 「どっこい遣らぬわ、誰でも来い、家の亭主ここに控えた。「何
 をと、八蔵は隠し持ったる鉄棒を振翳ふりかざして飛懸とびかかれば、非力の
 得衛仰天して、蒼あおくなつて押隔つれど、腰はわなわな気はあぶあ
 ぶ、困こまじ果てたるその処へ女房を前に銀平ぎんぺいが一室ひとまを出でて駈かけ来

りぬ。

銀平は何思いけん、勢いきおいに乗る八蔵を取つつて突除つぎのけずいと立ち、

「かどわかし勾引の罪人、御用だツ。と呼われば、八蔵もまた何とかしけ

む、「ええ、と吃びつくり驚身をひる翻がえして、外おもてへ遁出にげだし雲を霞、遁が

すものかと銀平は門口まで追懸ゆくてけ出で、前途を見渡ひとりごとし独言、

「素早い、野郎だ。取遁がした、残念々々と引返せば、得右衛門

は興覚顔にて、「つい混雑おつきに紛れまして、まだ御挨拶も申しませ

ん。貴下あなたは今しがた御着おつきになつた御客様、さてはその筋の。と敬

えば、銀平したり顔に打うちうなず頷うむき、「うむ、僕は横須賀の探偵だ。」

遁はかしよげると見せかけ八蔵は遠くも走らず取つつて返し、裏手へ廻うかがつ

て墓所はかしよに入り、下枝が臥ふしたる部室へやの前に、忍んで様子うかがを窺うかがえ

り。

横須賀の探偵に早替りせる銀平は、亭主に向いて声低く、「実は、横須賀のさる海軍士官の令嬢が、江の島へ参詣に出懸けたまま、今もって、帰って来ない。と口より出任せの嘘を吐けど、今の本事を見受けたる、得右衛門は少しも疑わず。真に受けて、「なるほどなるほど。と感じ入りたる体なり。銀平いよいよ凶に乗り、「ええ、それで必定誘拐されたという見込でな。僕が探偵の御用を帯びて、所々方々と捜している処だ。「御道理。「先刻からの様子では、お前の処に誰か婦人を蔵匿つてある。それをば悪者が嗅ぎ出して、奪返しに来た様子だが。……と言いつ亭主の顔を屹と見れば、鈍や探偵と信じて得右衛門は有体に、

「左様、その通り。実はこれこれの始末にて。と宵よりありし事柄を落も無くいうてのくれば、銀平はしてやつたりと肚はらに笑みて、表面うわべにますます容体を飾り、「ははあ、御奇特の事じゃ、聞く処では年齢と言ひ、風体と言ひ、全く僕が尋ねる令嬢に違ひない。いや、追つてその許に、恩賞の御沙汰これあるよう、僕から上申を致そう、たしかにそれが見たいものじゃが、というに亭主はほくほく喜び、見事善根をしたる所存、傍かたえぎき聞きする女房を流眊しりめに懸けて、乃だいこう公の功名まツこのとおりに、それ見たかといわぬばかり。あわれ銀平が悪智慧に欺あざむかれて、いそいと先達して、婦人を寝やすませおきたる室へ、手燭てしよくを取つて案内せり。

前には八蔵驚破すわといわばと、手ぐすね引きて待懸けたり。後うしろに

は銀平が手も無く得右衛門に一杯くわして、奪い行かむと謀りた^{はか}り。わずかに虎口を遁れ来て、仁者の懐に潜みながら、毒蛇の尾にて巻かれたる、下枝が不運憐むべし。

十二 無理強迫

赤城家にては泰助が、日蔽^{ひおおい}に隠れし処へ、人形室の戸を開きて、得三、高田、老婆お録、三人の者入^{いりきた}来りぬ、程好き処に座を占めて、お録は携え来りたる酒と肴^{さかな}を置^{おきな}排べ、大洋燈^{おおランプ}に取替えたれば、室内照りて真昼のごとし。得三その時膝押向け、

「高田様^{さん}、じゃ、お約束通り証文をまいて下さい。高田は懐中よ

り証書を出して、金一千円也と、書きたる処を見せびらかし、
 「いかにも承知は致したが、まだ不可ません。なにしましてしまった
 ら、綺麗さっぱりとお返し申そうまずそれまでは、とまた懐へ納
 め、おとがいな頤を撫でている。「お録、それぞれ。と得三が促し立つれば、
 老婆は心得、莞爾やかに高田に向いて、「お芽出度存じます。唯
だいま今花嫁御を。……と立上り、くだん件の人形の被を掲げてくぐ潜り入りし
 が、「じたばたせずにおいでなさい、という声しつ。今しがた見
 えずなりたる、美人のこがいな小腕をじゃけん邪慳につか掴みて、身をのが脱れんともた悶
 えあせるをようしゃ容赦なくひきいだ引出しぬ。美人は両手に顔を押えて身を
すく縮ましておのの戦きいたり。

得三これを打見遣り、「お藤、かねて言い聞かした通り、今夜

は媚を授けてやるぞ。さぞ待遠であつたろうの。と空そらうそぶ嘯なげきて

打笑えば、美人はわつと泣伏しぬ。高田はお藤をじろりと見て、

「だが千円は頗すこぶる高直こうじきだ。「考えて御覽なさい。これ程の玉な

ら、潰つぶしに売つたつて三年の年期にして四五百円がものはあります。

それを貴下あなたは、初物をせしめるばかりか、生涯のなぐさみにする

のだもの、こちらは見切つて大安売だ。千円は安価やすいものだね。

「それもそうじやな。どれ、一つ杯を献さそう。この処ちよいとお

儀式だ。と独り喜悅よがりの助平顔づら、老婆は齒朶はぐきを露むき出して、「直すくと

屏風びょうぶを廻まわしましょうよ。「それが可いい。と得三うなずは頷うなずきけり。虎

狼や鼻はなに取囲とまれたる犠牲いけにえの、生きたる心地は無なき娘も、酷薄

無道のこの談話はなしを聞きたる心はいかならむ。絶えも入るべき風情

を見て、得三は叱るように、「おい、藤。高田様がお盃を下さる、頂戴しろ。これッ、人が物を言うに返事もしないか。と声荒らかに呼わりて、掴み挫がんに有様に、お藤は霜枯の虫の音にて、「あれ、御堪忍なさいまし。「何も謝罪する事アねえ。機嫌よくお盃を受けろというのだ。ええ、忌々しい、めそめそ泣いてばかりいやあがる。これお録、媒灼人役だ。ちと、言聞かしてやんな。老婆は声を繕いて、「お嬢様、どうしたものでございますね。御婚禮のお目出度に、泣いていらしつちやあ済ませません。まあ、涙を拭いて、婿様をお見上げ遊ばせ。どんなに優しいお顔でございませう。それはそれは可愛がつて下さいますよ、ねえ旦那様、と苦笑い、得三は「そうともそうとも。「ほんとに深切な御方つちやア

ありません。不足をおつしやては女冥利みょうりが尽きますよ。貴女あなた
 お恥かしいのかえ、と舐めるながごとく撫廻せば、お藤は身体からだを固
 うして、頭かぶりを掉ふるのみ答いらえは無し。高田はわざと怒り出し、「へ
 ん、好い面つらの皮だ。嫌いや否やなものなら貰ひいますまい。女早ひでりはしはし
 まいし。工手間くでまが懸かかるんなら破談にするぜ。と不興の体に得三は
 苛立いらだちて、「汝うぬ、渋太しぶとい阿魔あまだな。といいさまお藤の手を捉とらえ
 ば、「あれえ。「喧やかましいやい。と白うなじき頸くびを驚おどろかす、
 生意氣ごのみに人好ごのみをしやあがる。汝うぬどうしても肯きかれないか。と睨ねめ附つ
 くれば、お藤は声を震わして、「そればっかりは、どうぞ堪忍し
 て下さいまし。と諸手を合すいじらしさ。「応うむ、肯きかれないな。
 よし、肯きかれないやあ無理に肯きかすまでのことだ。して見せる事

があるわい。というのは平常いづつもの折檻せつかんぞとお藤は手足すくを縮め紛る。得三は腕まくりして老婆を見返り、「お録、一番責めなきや塚らちが明くめえ。お客の前もでき廻ると見苦しい、ちよいと手を貸してくれ。老婆はチョツと舌打して、「ても強情なお嬢こだねえ。といいさま二人は立上りぬ。高田は高見に見物して、「これこれ台無しにしては悪いぜ。「なあに、売物だ。面つらに疵きずはつけません。

泰助は、幕の蔭よりこれを見て、躍り出いでんと思えども、敵は多し身は単ひとつ、滞はやるは血氣の不得策、今いうごとき情実なれば、よしや殴打おうちをなすとても、死に致す憂うれいはあらし。捕縛してその後に、渠等かれらの罪を数うるには、娘を打たすも方便ならんか、さはさりながらいたましし、と出るにも出られずとつおいつ、拳こぶしに思案を握

りけり。

得三はかねてかくあらんと用意したる、弓の折を振上ぐれば老婆はお藤の手を扼りぬ。はつしと撲たれて悲鳴を上げ、「ああれ御免なさいまし、御免なさいまし。と後へ反り前へ俯し、悶え苦しみのりあがり、紅蹴返す白脛はたわけき心を乱すになむ、高田駄平は酔えるがごとく、酒打ち飲みていたりけり。

十三 走馬燈

無慙むざんやなお藤は呼吸いきも絶々に、紅顔蒼白く変りつつ、苛責かしゃくの苦痛に堪えざりけん、「ひい、殺して下さい殺して。と、死を決

したる処女おとめの心。よしやこのまま撲殺うちころすとも、随うべくも見えざれば、得三ほとんど責せめ倦あぐみて、腕うでを擦さすりて答しもとを休やめつ。老婆はお藤を突放せば、身を支うべき気力も失うせて、はたと僵たおれて正体無し。

得三は、といきを吐つきて高田に向い、「御覧の通りで仕様がありません。式作法には無いことだが、お藤の手足をふん縛しばつて、そうして貴下あなたに差上げましょう、のう、お録、それが可いじやないか。「それが好ようございます。その後は活いかすとも殺すとも、高田様の御存分になさいましたら、ねえ旦那。といえば得三引取つて、「ねえ高田様さん。駄平は舌舐したなめずりして、「慾よくにも得にももうとてもじやわい。そうして貰もらいましょうよ。「では証文をな。

「うう、承知、承知。ここに恐しき相談一決して、得三は猶予なく、お藤の帯に手を懸けぬ。娘は無念さ、恥かしさ。あれ、と前まへまえまづままま 褌引合して、踰よ躑ち躑ちながら遁にげんとあせる、裳もすそをお録が押うれば、得三は帯おび際ぎわ取つて屹きつと見え。高田は扇あふを颯さつと開き、骨あの間あいからのぞ覗のぞいて見る。知らせにつき道具廻る。

さても得右衛門は銀平を下枝の部屋いに誘いざ引ないつ、「此室ここに寝いさしておきました。と部屋の戸ひきあを曳開ひきあくれば、銀平のうしろ後にうしろ続つきて、女房も入つて見れば、こはいかに下枝の寝床は藻脱もぬけの殻か、主ぬしの姿は無かりけり。「や。「おや。「これは、と三人が呆れ果てて言葉も出でず。

銀平は驚きながら思うよう、亭主はあくまで探偵と、我を信じ

て疑わねば、下枝を別の部屋に蔵して、我を欺くびようもなし。こは必ず八蔵が何とかして便を得て、前に奪い出だせるならん。さすれば我はこの家に用無し。長居は無益と何気無く、「これは、怪しからん。ふとすると先刻遁失せた悪漢が小戻して、奪い取ったかも知れぬ、猶予する処でない。僕は直ぐに捜しに出るといわれて亭主は極悪げに、「飛んだことになりました、申訳がございませぬ。「なあに貴下の落度じやない、僕が職務の脱心であつた。いやしからば。と言ひ棄ててとつかわ外へ立出でて雪の下へと引返せば、とある小路の小暗き処に八蔵は隠れいつ、銀平の来かかるを、小手で招いて、「おい、ここだよ。」

お藤は得三の手籠にされて、遂には帯も解け広がりぬ。こは悲

しやと半狂乱、ひしと人形に抱き附きて、「おつかさん！ と血
 を絞る声。世に無き母に救を呼びて、取り縋る手を得三がもぎ離
 して捻じ上ぐれば、お録は落散る腰帯を手繰つてお藤を縛り附け、
 座敷の真中にずるずると、鬚を掴んで引出し、押しつけぬ。
 形怪しき火取虫いと大きやかなるが、今ほど此室に翔り来て、赫
 々たる洋燈の周囲を、飛び廻り、飛び狂い、火にあくがれてい
 たりしが、ぱつと羽たたき火屋の中へ逆さまに飛び入りつ、煽動
 に消える火とともに身を焦してぞ失せにけり。
 颯と照射入る月影に、お藤の顔は蒼うなり、人形の形は朦朧
 と、煙のごとく灰見えつ。靈山に撞く寺の鐘、丑満時を報げ来
 して、天地寂然として、室内陰々たり。

かかりし時、いずくともなく声ありて、「お待ち！ と一ひとこと言
呼ばわり叫びぬ。

思いがけねば、得三等、誰そやと見廻す座敷うちの中に、我々と人
形の外には人に肖にたらむ者も無し。三人奇異の思いをなすうち、
誰たが手を触れしということ無きに人形の被かすらりと脱け落ちて、
上じょうろう 藤ふじの顔かんばん頭あたまわれぬ。啊呀あなやと顔を見合す処ところに、いと物凄ものぢき女の
声あり。「無法を働とく悪人等ども、天の御罰ごばちを知らないか。そういう
婚姻は決してなりません。」

幕の内なる泰助さえ、この声を怪しみぬ。前にも既に説いうごと
く、この人形は亡き母として姉あねいもと妹いもが慕かしい齊眉物かしくなれば、宇宙
の鬼神感動して、仮に上藤の口を藉かりかかる怪語を放つらんと覺

えず全身粟生あわだてり。まして得三高田等は、驚き恐れつ怪しみて、一人立ち、二人立ち、次第に床の前へ進み、熟じつと人形を凝視みつめつたり。三人は少時しばらく茫然みたりたり。

機とぎこそ来たれ。と泰助が、幕を絞あつて頭あられたり。名にし負う

三日月の姿をちらと見せるとおもえば、早くもお藤を小脇いに抱いだき、身ひるがを翻ひえして部屋を出でぬ。まことに分秒電火の働いき、一散しに下階たへ駈かけ下りて、先刻忍おびし勝手口より、衝つと門内のに遁のがれ出いづれば、メリケンだねの巨犬おおいぬ一頭、泰助の姿を見て、凄すまじく吠いえ出いせり。

南無三、同時に轟然こうぜん一発、頭こうべを覗ねつて打出うちす短銃ピストル。

幸い狙そいは外それたれど泰助はやや狼狽ろうばいして、内より門を開けんとすれば、蹶きようぜん然ぜんたる足音門前に起りて、外よりもまた内に

入らんとするものありけり。

泰助蒼くなりて一足退れば、轟然たり、短銃の第二発。

いとも危うく身を遁れて、泰助は振り返り、屹と高樓を見上ぐれば、得三、高田相並んで、窓より半身を乗出し、逆落しに狙う短銃の弾丸は続いて飛来らん。その時門の扉を開きて、つと入るは銀平、八蔵、連立ちて今帰れるなり。

さすがの泰助も度を失いぬ。

短銃の第三発轟然。

十四 血の痕

賈探偵の銀平が出去りたる後、得右衛門はなお不審晴れ遣らねば、室の内を見廻るに、畳に附たる血の痕あり。一箇処のみか二三箇処。ここかしこにぼたぼたと溢れたるが、敷居を越して縁側より裏庭の飛石に続き、石燈籠の辺には断えて垣根の外にまた続きり。こは怪やと不気味ながら、その血の痕を拾い行くに、墓原を通りて竹藪を潜り、裏手の田圃の畦道より、南を指して印されたり。

一旦助けんと思ひ込みたる婦人なれば、このままにて寐入らんは口惜し。この血の跡を慕い行かばその行先を突留め得べきが、単身にては気味悪しと、一まず家に立歸りて、近隣の壮佼の究つきよう
 竟なるを四人ばかり語らいぬ。

各々興ある事と勇み立ち、読本よみほんでこそ見たれ、婦人といえば
 土蜘蛛つちぐもに縁あり。さしずめ我等は綱、金時、得右衛門の頼光らいこうを
 中央まんなかにして、殿しんがりに貞光さだみつ季武すえたけ、それ押出せと五人にて、棍よりほ
 棒う、鎌など得物を携え、鉢巻しめて動揺どよめくは、田舎茶番と見
 えにけり。

女房は独り機嫌悪く、由緒よしなき婦人おんなを引入れて、蒲団ふとんは汚れ畳
 は台無し。鶏卵たまごの氷のと喰べさせて、一言ひとことの礼も聞かず。流れ
 渡かめつた洋犬でさえ骨一つでちんちんあずけお預はするものを。おまけに
 横須賀の探偵とかいう人は、茶菓子たを無銭だでせしめて去いんだ。と
 苦々しげにつぶや呟つぶやきて、あら寝ねむたや、と夜着ひっかつ引被ひっかつぎ、亭主を見送り
 もせざりける。

得右衛門を始めとして四人よつたりのわかもの壮伎は、茶碗酒にて元気を養
 い一杯機嫌で立出でつ。惜しややみ暗夜ならたいまつ松明を、とも点して威勢は
 好よからんなど、語り合いつつ畦伝い、血の痕を踏んで行く程に、
 雪の下に近づきぬ。金時真まっさき先に二の足踏み、「得右衛門もう帰
 ろうぜ。と声の調子も変になり、進みかねて立止まれば、「これ
 さお主ぬしはどうしたものだ。と言い励す得右衛門。綱は上意を承り、
 「親方、大人気無い、廃止よしにしましょう。余よそ所なら可いいが、雪の
 下はちと、なあ、おい。と見返れば貞光が、「そうだともそうだ
 とも、もうかれこれ十二時だろう。という後しりにつき季武は、「今
 しがた靈山の子ここのつ刻を打った、これから先が妖物ばけものの夜世界よ。
 と一同にしりごみ逡巡すれば、「ええ、弱虫めら何のこれたかが幽霊だ。

腰の無い物なら相撲を取ると人間の方が二本足だけ強身だぜ。と口にはいえどおのれ己さえ腰より下は震えけり。金時は頭こうべを掉ふり、「な
に鬼や土蜘蛛なら、糸瓜へちまとも思わねえ。」「己おれもさ、狒ひひ々や巨蛇うわばみ
なら、片腕で退治て見せらあ。」「我おいらだつて天狗の片翼を斬つて落
すくらいなら、朝飯前だ。」「ここにも狼の百足は立処に裂いて棄
てる強つわもの者が控えておると、口から出任せ吹き立つるに、得右衛
門はあてられて、「豪気えらいえらい々々、その口で歩行あるいたら足よりは達者
なものだ。さあ行ゆこうかい。といえぼどんじりの季武が、「とこ
ろが、幽霊は大嫌きらい否ひさ。」「弁慶も女は嫌否かッ。」「宮本無三四むさしは
雷らいに恐れて震えたという。」「遠山喜六という先生は、蛙を見ると
立たち竦すくみになつたとしてある。

「金時ここにおいてか幽霊が大禁物。」「綱もすなわち幽霊には恐れる。といわれて得右衛門大きに弱り、このまま帰らんは余り腑甲斐無し、何卒して引張り行かん。はて好い工夫はおつとある。」「どうだ。一所に交際つてくれたら、翌日とは言わず帰り次第藤沢（宿場女郎の居る処）を奢つてやるが、と言えば四人顔見合わせ、「なるほどたかの知れた幽霊だ。」「この中に人を殺したものは無いから、まず命に別条はあるまい。」「むむ、背負てくれがちと怪しいが、「ままよ行こうか、「おう。」「うむ。と色で纏まる壮佼等、よしこの都々逸唱い連れ、赤城の裏手へ来たりしが、ここに血の痕途断れたり。

得右衛門立停つて四辺を見廻し、「皆待つたり。この家はど

うやら、例の妖物屋敷らしいが、はてな。して見るとあの婦人おんなも化生けしようのものであつたか知らん。道理で来てから帰るまで変なことづくめ、しかし幽霊でも己おれが一いつかど廉の世話をしつたから、空あだとは思うまい。何のせいだかあの婦人おんなは、心から可愛かわゆうて不便ふびんでならぬ。今じゃ知ちかづき己おれだから恐いとも思わぬわい。おい、おらあ、一番表へ廻つて見て来るから、一所に來い。といえども一人として応ずる者無し。「そんなら待つていろ、どれ、幽霊に逢うて來ましょ。と得右衛門ただ一人、板塀を廻つて見えすなりぬ。

四人の壮佼は、後に残りて、口さえもよう利かれず。早夜よは更けて、夏とはいえど、風冷ひやひや々と身に染みて、戦慄ぞつと寒氣のさすほどに、酔えいさえ醒さめて茫然と金時は破垣やれがきに依懸よりかかり、眠氣つき

たる身体からだの重量おもみに、竹はめつきと折れたりけり。そりやこそ出たぞ、と驚き慌て、得右衛門も待ち合えず、命からがら遁帰りぬ。

十五 火に入る虫

短銃ピストルの筒口に濃き煙の立つと同時に泰助が魂消たまぎる末期さいげの絶叫、

第三発は命中せり。

渠かれは立竦たちすくみになりてぶるぶると震えたるが、鮮血なまぢたらたらと頬ほに流れつ、抱いだきたるお藤をどうと投落して、屏風びょうぶのごとく倒れたり。

それと見て駈け寄る二人の悪僕、得三、高田、お録もろとも急

ぎ内より出で来りぬ。高田はお藤を抱き上げて、「おお、可哀相にさぞ吃驚びつくりしたろう、すんでのことで悪漢わるものが誘拐かどわかそうとした。もう好いよわい、泣くな泣くな。と背搔撫せなかないなでて助いたわれば、得三もほつと呼吸いき、「あ、好かつた。何者だ、大胆な、人形が声を出したのに度胆を抜かれた処へ幕うしろの後から飛出しやあがつて、ほんとに驚いたぜ。お録、早く内へ連れて行きな。「へい承かしこまりました。」と高田の手よりお藤を抱取り肩に掛けて連れて行く。

「まず、安心だ。うん八蔵けえ帰かえつたか、それその死骸しがいの面つらを見いと、指図さしずに八蔵心得くさむらなて叢中ひきずより泰助を引摺り出し、「おや、此奴こいつあ探偵だ。我おれを非道ひどい目に逢わしやあがつた。「何、どうしたと、殺やり損そくなつて反あべこべ対あてみに当身くらを喰くらつた。それだから虚うつかり氣手あてみを出すな

と言わねえことか。や、銀平殿お前もお帰りか。「はい、旦那唯今。「うむ、御苦勞、なに下枝様さんはどうじゃ。「早速ながら下枝め奴は知れましたか。と二人ひと齊しく問懸くれば、銀平、八蔵かたみ交代わりに、八橋楼にての始末を語り、「それでね、いざという段になつて部屋へ這入ると御本人様さんどこへ消えたか見えなくなりまして。これは八蔵殿どんが前さきへ廻つて連出したのかと思つた処が、のう八蔵殿。「おおさ、己おれも墓場の方で、銀平様さんの合図を待つてましたが、別に嬢様あぐみの出て来る姿を見附けませんで、「もうもう尋たずね飽あぐみ倦みまして、夜よも更けますし、旦那方の御智慧を借りようと存じましてひとまず帰りました。というに得こころ三頭べを傾けやや久しく思慮かんがえいたるが、それにて思い当りたり。「して見ると下枝はま

た家内へ帰つて来たかも知れぬ。というのは、今しがた誰も居な
 いのに声が懸つて、人形が物を言うていこたあ無い筈だと思つた
 が、下枝の業であつたかも知れぬわい。待て、一番家内を検べて
 見よう。その死骸はな、よく死んだことを見極めて、家内の雑具
 部屋へ入れておけ。高田様、貴下も御迷惑であらうが手伝つて下
 枝を捜して下さい。探偵は片付けてしまつたト、これで下枝さえ
 見附ければ、落着いてお藤が始末も附けます。と高田を誘い内に
 入りぬ。

八蔵は泰助に恨あれば、その頭蓋骨は砕かれけん髪の毛に黒血
 凝りつき、頬より胸に鮮血迸り眼を塞ぎ齒を切り、二目とは見
 られぬ様にて、死しおれるにもかかわらず。なお先刻の腹癒に、

滅茶々に撲り潰さんと、例の鉄棒を捻る時、銀平は耳を聳て、
「待て！ 誰か門を叩くぜ。八蔵はよくも聞かず、「日が暮ると
人ツ子一人通らねえこの辺だ。今時誰が来るもんか。といううち
門の戸を丁、丁、丁、丁、「お頼み申す。という声あり。

八蔵は急いで鉄棒押隠し、「いかさま、叩くわ。「探偵の合棒
でも来はしねえか。己あ見て来る、死骸を早く、「合点だ。と銀
平は泰助の死骸を運び去りつ。八蔵は門の際に到り、「誰だね。

「へい私。「へい私では解らないよ。夜夜中けたたましい何の用
だ。戸外にて、「ええ、滑川の者ですが、お家へ婦人が入って来
はしませんかい。八蔵は聞覚えあるたしかに得右衛門の声なれば、
はてなと思ひ、「どんな女だ。「中肉中脊、凄いほど美しい婦人。

と聞いて八蔵心可笑しく、「その様な者は来ない、何ぞまた此家へ来たという次第でもあるのか。「私どもの部屋から溢れて続ける血の痕が、お邸の裏手で止まっております。」

さては下枝は得三が推量通り、再び帰りしに相違なからん。それはそれにて可いとして、少時なりとも下枝を蔵匿たる旅店の亭主、女の口より言い洩して主人を始め我までの悪事を心得おらんも知れず。遁がしはやらじ、とやにわに門の扉を開けて、むずと得右衛門の手を捉え、「婦人は居るから逢わしてくれ、さあ入れ。」と引入れて、門の戸はたと鎖しければ、得右衛門はおどおどしながら、八蔵を見て吃驚仰天、「やあ此方は先刻の、「うむ、用があるこつちへ来いと、力任せに引立てられ、鬼に捕らる

る心地して、大声上げて救いを呼べど、四天王の面々はこの時既に遁じたれば、誰も助くる者無くて、あわれとりこ哀や擒となりにけり。

十六 啊呀！

今は悪魔ばかりの舞台となりぬ。磨ぎ清すましたる三日月は、惜しや雲間に隠れ行き、ゆかり縁の藤の紫は、厄難いまだ解けずして再び奈落に陥りつ、外より来れる得右衛門も鬼の手に捕られたり。さてかの下枝はいかならん。

さるほどに得三は高田とともに家内うちに入り、下枝は居おらずや見えざるかと、あらゆる部屋を漁あさり来て、北の台の座敷牢を念のた

め開き見れば、射込む洋燈ランペンの光の下に白く蠢うごめくもののあるにぞ、
 近寄り見れば果せるかな、下枝はここにぞ発見みだされたる。

かばかり堅固なる囿かこいの内よりそもいかにして脱け出でけん、な
 お人形の後うしろより声を発いだして無法なる婚姻を禁めしも、汝なんじなるか。
 と得三は下枝に責め問うたがい、疑うたがを晴さんとと思うめれど、高田はしき
 りに心急ぎて、早くお藤の方かたをつけよ。夏とはいえど夜は更けた
 り。さまでに時刻後おくれては、枕に就くと鶏とりうたわむ、一刻の価値あたい
 千金と、ひたすら式を急ぐになん。さはとて下枝を引起して、足
 あらばこそ歩みも出いでめ、こうして置くにしくことあらじ。人に物
 を思わせたる報酬むくいはかくぞと詈のりて、下枝が細こき小腕こがを後手に
 捻ねじ上げて、縛いまめんとなしければ、下枝は糸よりなお細く、眼を

見開きて恨うらめしげに、「もう大抵に酷ひどうしたが好ようござんしよう。坐まつている事も出来ぬように弱り果てた私の身体からだ、どこへも参りは致いたしませぬ。といえは得三あざわら冷笑い、「その手はくわぬわ。また出て失うしようと思いやあがつて、へん、そう旨くはゆかないや、ちつとの間まの辛抱だ。後刻のちに来て一所に寝てやる。ふむ、痛いたいか様さまを見ろ。と下枝の手を見て、「おや、右の小指をどうかしたな、こいつは一節切つてあらあ。やい、どこへ行つて指切きり断きりして来たんだ。と問いかかるを高田は押止め、「まあまあ、そんな事ア何時でも可いいて。早く我われの方を、「はて、せわしない今行きます。と出血や休やまざる小指の血にて、我わがのてのひら掌の汚けがれたるにぞ、かつぷと唾を吐き懸けて、下枝の袖にて押拭い、高田と連立ち急

がわしく、人形室に赴きぬ。後より八蔵入来り、こうこういう次第にて、八橋楼の亭主を捕え、一室に押込め置きたるが、というに得三領きて、その働を誉めそやし、後にて計らうべき事あり。そのままにして置きて、銀平と勝手にて酒を飲んで寛げ。と八蔵を去なして手を打鳴し、「録よ、お録。と呼び立つれど、老婆は更に答せねば、「はてな、お録といえは先刻から皆目姿を見せないが、ははあ、疲れてどこかで眠つたものと見える。老年というものはええ！ 埒の明かぬ。と呟きつつ高田に向い、「どうせ横紙破りの祝言だ。媒灼も何も要つた物ではない。どれ、藤を進げますから。と例の被を取除くれば、この人形は左の手にて小褻を搔取り、右の手を上へ差伸べて被を支うるものにして、上げ

たる手にてひるがえ翻る、綾羅りょうらの袖の八口やつくちと、メめたる錦にしきの帯との間に、人一人肩をすぼむれば這入らるべき透間あり。そこに居て壁を押しせば、縦三尺幅四尺向うへ開く仕懸しかけにて、すべての機械は人形に、隠るる仕方巧みにして、戸になる壁の継目など、肉眼にては見分け難し。得三手てしよく燭にてこの仕懸を見せ、「平常ふだんは鎖じようを下してお藤を入れておくが、今晚は貴下あなたに差上げるので、開けたままだ。こちらへお入り。と先に立ちて行く後より、高田も入りて見るに、壁の彼方うちらにも一室あり。畳を敷くこと三畳ばかり。「いちよんの間まだ。と高田がいえば、得三呵からから々と打笑うちわらいて、「東京の待合にもこれ程の仕懸はあるまい。といいつつ四辺あたりを見廻すに、今しがた泰助の手より奪い返してお録ここに此室へ入れ置くよう、

命いのちけたりしお藤の姿、またもや消えて見えざりければ、啊あなや呀とばかり顔色がんしよく変じぬ。

高田は太いたく不興して、「令嬢はどうしました。え、お藤様さんはどうしたんです。とせきこむにぞ、得三は当惑の額を撫で、「いやはや、お談話はなしになりません。藤が居なくなりました。高田は顔色変え、「何だ、お藤が居なくなつたと?」「この通り、この室より外に入れて置く処はない。実に不思議でなりません。とさすがの得三も呆れ果てて、悄しおれ返れば高田は勃然むっとして、「そういうことのあるう道理は無い。ふふん、こりやにわかにあの娘が惜しくなつたのだな。「滅相な。「いや、それに違いありません。隠して置いて、我われを欺あざむくのだ。「と思おぼしめ召すのも無理ではない。余り

変で自分で自分を疑う位です。先刻さつきから見えぬといい、あるいは
婆め々奴めが連れ出しはしないかと思うばかりで、それより他ほかに判断
の附つけよう様がございません。早速探し出しますで、今夜の処は何分
にも御猶予を願いたい。と腰を屈かがめ、揉手もみでをして、ひたすら頼め
どいつかな肯きかず、「なんのかのと、体の可いことを言うが、婆
々なと馴なれ合つてする仕事に極まった。誰だと思う、ええ、つがも
ねえ、浜で火吸器すいふくくべという高田駄平だ。そんな拙策あまてを喰う者か。
「まあまあそう一概におつしやらずに、別懇の間に免じて。「別
懇も昨今もあるものか。可よし我われもたつてお藤を呉れとは言わぬ。
そん代でえに貸した金千円、元利揃えてたつた今貰おうかい。と証文
眼めさき前に附着めさきすれば、強情我慢の得三も何と返さん言葉も無く困こじ

果ててぞいたりける。

十七 同士討

高田はなおも詰寄りて、「妖物ばけもの屋敷に長居は無益むやくだ。直ぐ帰るから早く渡せ。「そりや借りた金だ抵当のお藤が居なくなれば、きつとお返済かえし申すが、まだ家の財産も我が所有ものにはならず、千円という大金、今といつては致方がございません。どうぞ暫時しばらくの処を御勘弁。「うんや、ならねえ。この駄平、言い出したからは、血を絞つても取らねば帰らぬ。きりきりここへ出しなさい。と言い募るに得三は赫かつとして、「ここな、没分わからずや曉漢。無い者ア仕方が

ねえ。と足を出せば、「踏む気だな、可いわ。踏むならば踏んで見ろ。おおそれながらと罷り出て、汝の悪事を訴えて、首にしてやる覚悟しやあがれ。得三はぎよつとして、「何の、踏むなどという凶太い了簡を出すものか。と慌つる状に高田は附入り、「そんなら金を、さあ返濟せ。「今といつては何ともどうも。「じゃ訴えて首にしようか。「それはあんまり御無体な。「ええ！ 面倒だ。と立懸れば、「まあ、待ってくれ。と袂を取るを、「乞食め、動くな。と振離され、得三たちまち血相変り、高田の帯際むずと掴みて、じりじりと引戻し、人形の後の切抜戸を、内よりはたと鎖しける。

何をかなしけむ。壁厚ければ、内の物音外へは漏れず。

ややありて戸を開き差出したる得三の顔は、眼据つて唇わななき、四辺あたりを屹きつと見廻して、「八蔵、八蔵、と呼懸けたり。八蔵は入来りぬ。得三は声を潜め、「八、ちよつとここへ来い。「へい、何、何事でございます。と人形の袖を潜くぐつて密室の戸口に到れば、得三は振返つて後うしろを指し、「これを。……八蔵は覗のぞき込みて反そり返り「ひやつ、高田様さんが自殺をしたツ。と叫ぶを、「叱しつ！
 声高しと押止めて、眼を見合わせ少しばらく時だんまり無言、この時一番鶏の声あり。

得三は片頬かたほに物凄えみき笑を含みて、「八蔵。という顔を下より見上げて、「へい。「お前にもそう見えるかい。「何な、何な、何なにが。

「いやさ。高田の死骸は自殺と見えるか。「へい。自分で短刀の

柄つかを握つかつてそして自分の喉のどを突ついてれば誰が見ても全く自殺。

「応うむ、たしかにそう見える。が、実は我おれが殺ころしたのだ。「ええ、

お殺やんなすつたか。「突然藤が居なくなつたぞ。八、先刻さつきからお録

は見懸みけまいな。「へい、あの婆ばあさん様はどこへ行つたか居りませ

ん。「そうだろう。彼奴あいつもしたたか者だ。お藤を誘かどわか拐かどわかして行つ

たに違ちがひない。あの嬢こはまだ小兒こどもだ。何にも知らないから可よし、

老婆ばばあも、我等おれらと一所に働はたらいた奴だ。人に悪事は饒しやべる舌しやべるまい。惜あはく

も無し、心配も無いが、高田の業突張ごうつくばり、大層怒おこつてな。お藤が

なくなつたら即金で千円返せ、返さなけりや、訴うえると言い募もつ

て、あの火吸器すいふくべだもの、何というても肯うくものか。すんでに駈か

出でそうとしやあがる。ままよ毒喰くわば皿迄おれと、我おれが突殺つしたのだ。

「それは好ようございました。」「すると奴やつこさん苦しいものだから、拳こぶしでしつかりとこの通り短刀どすの柄を握ったのよ。」「体の可い自殺でございますね。」「そうよ。そこで己おれが旨い事を案じついたて。これからあの下枝を殺してさ。」「下枝様さんを。」「三年このかた以来辛抱して、氣永なびに靡なびくのを待っていたが、ああ強情では仕様が無ねえ。今では憎さが百倍だ。」「虐なぶり殺ころしにして腹癒はらいして、そうして下枝そばの傍そばに高田の死骸を僵たおして置く。の、そうすれば誰が目にも、高田が下枝を殺して、自殺をしたと見えるというものだ。何と可い工夫であろうが。」「

さりとは底の知れぬ悪党なり。八蔵は手を拍うつて「旨い。と叫べり。」「そうして己おれが口さきの前で旨く世間あざむを欺まげば、他ほかに親類は無

し、赤城家の財産はころりと我が手へ転がり込む。何と八蔵そうなる日にはお前に一割は遣るよ。「ええ難有い、夢になるな夢になるな。もうこれツ切り御苦勞は懸けないが、もう一番頼まれしてくれ。「へい、何なりとも。「銀平はどうした。「しきりに飲んでおります。「彼奴も序に片付けてしまいたい、家でやつては面倒だから、これから飲直すといつて連出してな。「へいへい、なるほど。「どこかへ行つて酒を飲まして、ちよいと例の毒薬を飲ましかあ訳は無い、酔つて寝たようになって、翌日の朝はこの世をおさらばだ。「承りました。しかし今時青楼で起きていましょうか。「藤沢の女郎屋は遠いから、長谷あたりの淫売店へ行けば、いつでも起きていらあ、一所にお前も寝て来るが可い。

「じやあ直ぐと参ります。御苦労だな。「なんの貴下あなた。と行懸くるを、「待て、待て。「え。「宿屋の亭主とかはどうしたのだ。「手足を縛つて猿轡さるぐつわを噛かまして、雑具部屋へ入れとききました。「よし、よし。仕事が済んだら検しらべて見て大抵なら無事に帰してやれ。「へい左様なら。と八蔵は勝手に行き去りて銀平を見れば、「八、やい、置去りにしてどこへ行つていた。というさえ今は巻舌にて、泥のごとくに酔うたるを、飲直さむとて連出しぬ。

十八 虐殺

得三は他にひとふり一口の短刀かいけんを取り出して、腰に帯び、下枝を殺さ

んと心を決めて、北の台に赴き見れば、小手高う背に捻じて縛めて、柱に結え附け置きたるまま、下枝は膝に額を埋め、身動きもせでいたりけり。

「約束通り寝に來た。と肩に手を懸け引起し、移ろい果てたる花の色、悩める風情を打視め、「どうだ、切ないか。永い年月よく辛抱をした。豪い者だ。感心な女だ。その性根にすっかり惚れた。柔順に抱かれて寝る気は無いか。と嘲弄されて切齒をなし、「ええ汚らわしい、聞とうござんせぬ。と頭を掉れば嘲笑い、「聞きとうのうても聞かさにや置かぬ、もう一度念のためだが、思い切つて応といわないか。「嫌否ですよ。「そうか、淡々としたものだ。そんならこつちへ來な。好い者を見せてやる。

立て、ええ立たないか。「あれ。と下枝は引立られ、殺氣満ちたる得三の面色、こは殺さるるに極きわまつたりと、屠所としよの羊のとぼとぼと、廊下伝いに歩は一步、死地に近寄る哀れさよ。蜉蝣ふゆうの命、朝あしたの露、そも果敢はかなしといわば言え、身に比べなば何かあらむ。

閻王えんおうの使者に追立てられ、歩むに長き廻廊も死しにに行く身はい

と近く、人形室に引入れられて亡き母の存いまそか生りし日を思い出し、

下枝は涙さしぐみぬ。さはあれ業苦の浮世を遁のがれ、天堂おわに在す御おんてば

傍へ行くと思えば殺さるる生命いのちはさらさら惜からじと、下枝は

少しも悪怯わるびれず。その時得三下枝をば、高田の傍かたえに押据えつ、い

と見苦しき死様を指さしていいけるは、「下枝見ろ、この顔色つらつきを。

殺されるのはなかなか一通りの苦しみにゃないぜ、それもこう一

思いに殺ればまだしもだが、いざお前を殺すという時には、これ

迄の腹癒はらいせに、かねても言い聞かした通り、虐なぶり殺ころしにしてやる

のだ。可いいか、それでも可いいか。これと、肩を押えてゆすぶれば、

打戦うちわななくのみ答いっえは無し。 「それからまだある。この男と、お前と、

情しんじゆう 死しをした様にして死恥せぢを曝さらすのだ。どうだ。どうだ。下枝

は恨めしげに眼を 得三さん様、貴下あなたは可愛あたまいねえ。 ところいえば

可いい。それは出来ないだろう。やつぱり、斬られたり、突かれた

りする方が希望のぞみなのか、さあ何と。と言わるるごとにひやひやと

身体からだに冷たき汗しつとり、斬刻きりきぎまるるよりつらからめ。猛獸い儀い

牲けにえを獲えて直ぐには殺さず 暫時しばらくこれもてを弄あそびて、早あきた懺ありけむ得三

は、下枝をはたと蹴返せば、苦あつと仰のけざま様たおに僵たおれつつ呼吸いきも絶やげ

に唸うめきいたり。「やい、婦人おんな、冥途めいどの土産に聞かしてやる。汝きさまの
 母親はな。顔も氣質きだても汝きさまに肖にて、やっぱり我おれの言うことを聞かな
 かったから、毒を飲まして得三が殺したのだ。下枝は驚きに気力
 を復して、打震えて力無き膝立直して起き返り、「怪しき死し様しよう
 遊あそばしたが、そんなら得三、おのれがかい。「おう、我おれだ。驚い
 たか。「ええ憎らしいその咽喉のどへ喰く附ついてやりたいねえ。「へ、
 へ、唇へ喰く附ついて、接吻キッスならば希望のぞみだが、咽喉のどへは眞平御免蒙こうむる。
 どれ手を下ろして料りようろ理りうか。と立懸たちかかられて、「あれえ、人殺
 し。と一生懸命もすそ、裳もすそを乱して遁にげ出いづれば、縛いましめの縄の端を踏止ふめ
 られて後居しりいに倒れ、「誰ぞ助けて、助けて。と泣声なみか噎からして叫こび
 立つれば、得三は打笑い、「よくある奴だ。殺して欲いの死にた

いのと、口癖にいうていて、いざとなるとその通り。ても未練な
 婦人おんなだな。「いえ、死にとうない、死にとうない。親を殺した敵かたき
 と知っては、私や殺されるのは口惜くちおしい。と伏しつ転まろびつ身をあ
 せりぬ。

得三は床柱を見て屈竟もがと打うち頷うなずき、やにわに下枝を抱いだき寄せ、
 「跪もがくな。じつとしておれ。とかの人形と押並べて、床柱へぐる
 ぐる巻まきに下枝の手足を縛り付け、一足退すつて突立つたちたり。下枝
 は無念さ遣る方なく、身体からだを悶もだえて泣き悲しむを寛ゆる々と打見遣
 り、「今となつては汝きさまの方あたから随したがいます、財産も渡しますと吐ぬか
 しても許しはせぬ。と言いい放はなてば、下枝は顔こぼに溢こぼれかかる黒髪を
 颯さつと振分け、眼血まなこ走り、「得三さん様、どうしても殺すのか。という

声いとど、裏枯れたり。「うむ、なぶりごろし 虐殺にするのだ。「あれえ。

「何だ、まだびくびくするか、往生際の見苦しい奴だ。「そんならどうでも助からぬか、末期いまわの際に次三郎様さんにお目に懸かつて、おのれの悪事をお知らせ申かたきし敵が討かたきつて貰かいたい。と泣き入る涙も尽き果てて血をも絞らむばかりなり。「次三もおれな我が命いいつけて、八蔵が今朝毒殺したわい。「ええあの方まで殺したのか。御方の失うせさせたまいし上は、最早この世に望みは無し、と下枝は落がつか胆り気落ちして、「もう聞とうない、言とうない。さあお殺し。と口にて衣紋えもんを引合わせ、縛られたるまま合掌して、従しよう容として心中に観音の御名みなを念じける。

その時得三は袖を掲げて、雪より白き下枝の胸を、乳もあ頭らわに

押おしくつろ 寛くれば、動悸どうき烈しく胸騒さわだ立ちて腹は浪打つごとくなり。
全体虫が氣に喰はらわぬ腸わたわ断割たわつて出してやる。と刀引抜き逆手に取りぬ。

夜は正に三更万籟死して、天地は悪魔の独有たり。

(次三郎とは本間のこと、第一回より三回の間に出でて毒を飲のみみたる病人なり。鎌倉より東京のことなれば、敏さとき看みる官ひとの眼も届くまじとて書添え置く。)

十九 二重の壁

得ひ三と一たび度うご手を動ごさば、万事ここに休せむかな。下枝の命の終

らむには、この物語も休やみぬべし。さらばそれに先立て、一旦滑川の旅店まで遁のがれ出でたる下枝の、何とて再び家に歸りて屠ほふり殺さるる次第となりけむ、その顛てんまつ末を記し置くべし。

下枝は北の台に幽囚せられてより、春秋幾つか行きては歸れど、月も照さず花も訪とい来ず、眼に見る物は恐ろしき鉄くろがねの壁ばかりにて、日に新しゆうなるものは、苛かしゃく責の品の替るのみ、苦痛いうべくもあらざれど、家に伝わる財産も、我身の操も固く守護まもりて、明しつ暮しつ長き年、月日は今日にいたるまで、待てども助くる人無ければ、最早忍び兼ねて宵のほど、壁に頭かしらを打碎きて、自殺をせんと思ひ詰め、西向の壁の中央ただなかへ、ひしと額を触れけるに、不思議や壁は縦五尺、横三尺ばかり、裂けたらむがごとく颯さつと開

きて、身には微傷うすでも負わざりけり。

大名の住めりし邸やしきなれば、壁と見せて忍び戸こしらを拵え置き、それより間道への抜穴など、旧ふるき建物にはあることなり。人形の後うしろの小座敷もこれと同じきものなるべし。

こは怪しやと思いなから、開きたる壁の外を見るに、暗くてしかとは見分け難だんぼしごきが、壇階だんぼしご子めきたるものあり。静しずかに踏ふみて下り行くに足はやがて地に附きつ、暗さはいよいよ増りぬれど、土平らにて歩むに易し。西へ西へと志して爪探りに進み行けば、蝙蝠わほり顔に飛び違い、清水の滴したたはだえとお々膚を透して、物凄きこと言わむ方無し。とこうして道のほど、一町ばかり行きける時、遙はるかに梟くろうの目のごとき洞穴の出口見えぬ。

この洞穴は比企ヶ谷の森の中にあり。さして目立つほどのものにあらねば、誰も這はい入いつて見た者無し。

下枝は穴を這出でて始めて天日を拝したる、喜びたと譬とえんものも無く、死なんとしたる気を替えて、誰か慈悲ある人に縋すがりて、身の窮苦を歎なげき訴こえ、扶たすけを乞こわんと思いつる。そは夕暮のことにして、畦あぜ道みちより北かたの方、里ある方へぞ歩あみたれ。

(得三が高たか楼どのにて女を見たるはこの時なり。)

かくて下枝は滑川の八橋楼の裏手より、泰助の座敷に入りたるが、浮世に馴なれぬ女氣に人の邪正を謀はかりかね、うかとは口くちを利かれねば、黙して様子を見ているうち、別室に伴われ、一人残され寝床に臥して、越方行末思わい侘わび、涙に暮れていたりし折から、

かの八蔵に見とがめられぬ。そのみならず妹お藤を、今宵高田
 に娶めあわすよしかねて得三に聞いたれば、こもまた心懸りなり、一度
 家に立返りて何卒なにとぞお藤を救いだし、またこそ忍び出でなんと、
 忌いまわしき古巢に帰るとき、多くの人に怪あやしませて、赤城家に目を付け
 させなば、何かに便たよりよかるべしと小指一節喰い切つて、かの血の
 痕あとを赤城家の裏口まで印し置きて、再び件くだんの穴に入り冥途よみじを歩み
 て壇階子に足踏懸くれば月明し。いづくよりか洩もると見れば、
 壁を二重に造りなして、外の壁と内の壁の間にかかる踏壇を、仕
 懸けて穴へ導くにて透間より月の照射さすなり。直ぐ眼の下は裏庭に
 てこの時深くさむき叢ゑんたすにゑめる人ありければ、（これ泰助なり）浴衣の
 裳すそを引裂きて、小指の血にて文字したため、かかる用にもたたむ

かとして道にて拾いし礫こいしに包み、丁ちようと投ぐればあたかも可よし。その人の目に触れて、手に開かれしを見て嬉しく、さてお藤をばいかにせむ。

この壇階子の中央なかほどより道は両ふたつに岐わかれたり。右に行けば北の台なるかの座敷牢に出づべきを、下枝は左の方かたに行きぬ。見も知らざる廊下細くしていと長し。肩をすぼめてようように歩み行くに、両側はまた壁なり。理外の理さえありと聞くこは家の外ほかの家ならんか。十数年来住める身の、得三もこは知らざるなり。廊下の終る処に開戸あり、開けて入れば自おのずから音なく閉じて彼方かなたより顧みれば壁と見紛うばかりなり。ここぞかの人形の室の裏なる密室になんありける。

この時しも得三等らが、お藤を責めて婚姻を迫る折なりしかば、
 いかにはせば救い得られんかと、思い悩みいたるうち、火取虫に洋ラ
 燈消ンブえて、こよなき機会を得たるにぞ、怪しき声音に驚かせしに、
 折よく外にも人ありて妹を抱いだきて遁出にげいでたれば、嬉しやお藤は助
 かりぬ。我も早く出去らんとまたもや廊下を伝わりて穴に下りん
 と踏ふみまよ迷い、運拙つたのうしてまた旧もとの座敷牢に入り終んぬ。かかりし
 ほどに身は疲れ、小指の疵きずの痛苦劇いたみはげしく、心ばかりは急はやれども、
 足踰よろほ跟まいて腰起たたず、気さえ漸次しだいに遠くなりつ、前後も知らでい
 たりけるを、得三に見出されて、さてこそかくは悪魔の手に斬殺
 されんとするものなれ。

二十 赤城様——得三様

普門品ふもんぼん、大悲の誓願ちかいを祈念して、下枝は氣息奄奄えんえん々と、無何むか有うの里に入りつつも、刀尋段々壞とうじんだんだんねと唱うる時、得三は白刃を取直し、電光胸むなさき前に閃きらめき来りぬ。この景この時、室外に声あり。

「アカギサン、トクゾウサン。」

不意に驚き得三は今や下枝を突かんとしたる刀を控えて、耳傾ければ、「あかアぎさん、とくぞうさん。」

得三は我耳を疑うごとく、耳みみたぶ朶たぶに手をあてて眉を擡ひそめつ、傾聴すれば、たしかに人声、

「赤城様さん——得三様さん。」

得三はぎよつとして、四辺あたりを見廻し、人形の被かぎを取つて、下枝
 にすつぽりと打被うちかぶせ、己おのが所業を蔽おほい隠して、白刃たもとに袂たもとを打着
 せながら洋燈ランプの心を暗うする、さそくの氣転これで可しと、「誰
 だ。何誰どなたじゃ。」と呼懸くれば、答は無くて、「赤城様。得三様。
 しや忌々し何奴ぞと得三からりと部屋の戸開くれば、かの声少し
 遠ざかりて、また、「赤城様、得三様。「ええ、誰だ。誰だ。と
 つかつかと外おもてに出れば、廊下をばたばたと走る音して姿は見えず
 に、「赤得、赤得。背後うしろの方かたにてまた別人の声、「赤城様、得三
 様。啊呀あなやと背後うしろを見返れば以前の声が、「赤得、赤得。と笑うが
 ごとく泣くがごとく恨むがごとく嘲けるごとく、様々声の調子を
 変じて遠くよりまた近くより、透間もあらせず呼立てられ、得三

は赤くなり、蒼あおくなり、行きつ戻りつ、うろ、うろ、うろ。拍子に懸けて、「赤、赤、赤、赤。」「何者だ。何奴だ。出合え出合え。といいながら、得三は血眼ちまなこにて人形室へ駈け戻り、と見れば下枝は被を被せ置きたるまま寂として声をも立てず。「ちええ、面倒だ。と剣を揮ふるい、胸前むなさき目懸けて突込みしが、心急せきたる手元狂いて、肩先ぐざと突通せば、きやつと魂消たまぎる下枝の声。

途端に烈しく戸を打叩きて、「赤得、赤得。と叫び立つれば、「汝野狐奴うぬめ、また来うせた。と得三室外へ躍出づれば、ぱつと遁出にげだす人影あり。廊下の暗闇やみに姿を隠してまた——得三をぞ呼んだりける。

憎さも憎しと得三が、地踏じだんだふんで縦横やいばに刃うちふを打掉る滅多打。

声はようよう遙はるかになり、北の台にて哀かなげに、「あかアぎさん、とくぞうさん。——四あたり辺は寂しん然。

これより以前さき得三が人形室を走り出でて声する者を追いける時、室の外より得三と入いりちが違ちがいに、鳥のごとくに飛び込む者あり。突然下枝の被を外してこれを人形に被らせつ。その身は日ひ蔽おほの影に潜みぬ。

されば得三が引返し来て、被の上より突込みたるは、下枝にあらで人形なりけり。ただ下枝は右にありて床柱に縛し上げられつ、人形は左にありて床の間に据えられたる、肩は擦合うばかりなれば、白はくじん刃ものを刺したるとき、下枝は胆消え目も眩くらみて、絶叫せしはさもありなん。またもや声に呼び出されて、得三再び室の

外へ駈かけ行きたる時、幕に潜めるかの男は鼪いたちのごとく走り出で、手早く下枝の縄を解き、抱いだき下して耳に口、「心配すな。」と囁ささやきたり。時しも廊下を踏ふみ鳴ならして、得三の帰る様子に、かの男少し慌てる色ありしが、人形を傍わきへずらして柱に寄せ、被は取れて顔も形もあからさまなる、下枝を人形の跡へ突立せ、「声を立てるな。」と小声に教えて、己おのれは大音に、「赤城様、得三様。」いうかと思えば姿は亡なし。すでに幕の後うしろへ飛込みたるその早さ消ゆるに似たり。

かれもこれも一瞬時、得三は眼血まなこ走り、髪逆立ちて駈込つ、猶た予めう色無く柱に凭よれる被を被りし人形に、斬きりつけ突つきつけ、狂氣のごとく、愉快、愉快。と叫びける。同時に戸口へ顔を差出し、

「赤城様、得三様。「やあ、汝うぬは！ と得三が、物狂わしく顧みれば、「光来おいで、光来。ここまで光来と、小手にて招くに、得三は腰に付けたる短銃ピストルを発射間はなつまも焦躁もどかしく、手に取つて投附ランブくれば、ひらりとはずして遁出ひらりとすを、遣らじものを。とこの度は洋燈ランプを片手に追懸おっかけて、気も上の空何やらむ足に躓つまずき怪し飛びて、火影に見ればこはいかに、お藤を連れて身を隠せしと、思い詰つめたる老婆お録、手足を八重十文字くくに縛くくられつ、猿さる轡ぐつわさえ噛かまされて、芋いものごとくに転がりたり。

得三後居しりいにどうと坐し、「やい、この態さまはどうしたのだ。と口なる手拭退のけてやれば、お録はごほんせと咳き入りて、「はい、難ありがと有りうございます。「ええどうしたのだ。「はい、はい。もしお

聞きなされまし。あの時お藤様を人形の後へ隠して、それから貴
 下^{なた}階下^{した}へおりてがらくた部屋の前を通ると、内でがさがさいた
 しますから、鼠か知らん、と覗^{のぞ}きますとね、どうぞございましたよ
 う。あの探偵泰助奴^めがむくむくと起き上る処でございました。

「え！」

二十一 旭

幾度か水火の中に入出して、場数巧者の探偵吏、三日月と名に
 負う倉瀬泰助なれば、何とて脆^{もろ}くも得三の短銃^{ピストル}に僵^{たお}るべき。さ
 れば高^{たか}楼^{かどの}より狙い撃たれ、外よりは悪僕二人が打揃いて入り来

しは、さすがの泰助も今迄に余り経験無き危急の場合、一度は狼うばい狽うばいしたりしが、かねて携うる絵具にて、手早く血汐ちしおを装いて、第三発の放たれしを、避けつつわざと撃たれし体にて叢くさむらに僵れしに、果せるかな悪人輩ばらは誑そらじに死あざむに欺かれぬ。

さりながら八蔵がなお念のため鉄棒にて撲り潰なぐさむと犇ひしめくにごぞ、その時敵は二人なれば、蹴散らして一ひとたび度退かむか、さしては再び忍び入るにはなはだ便り悪ければ、太いたく心を痛めしが、あたかも好し得右衛門がこの折門を叩きしかば、難無く銀平いだに抱かれて、雑具部屋へ押込まれつ、後より得右衛門が擒とりこにされて、同じ室へ入れられたるをも、泰助はよく知れるなり。

四辺あたり静ずかになりしかば、潜ひそかに頭もちを擡もちぐる処を、老婆お録に見咎

められぬ。声立てさせじと飛とび菟かかりて、お録の咽喉のどを絞め上げ絞め上げ、老婆が呼吸いきも絶々に手を合して拝むを見澄まし、さらば生命いのちを許さむあいだ、お藤を閉込め置く処へ、案内せよ、と前さきに立たせ、例の人形室に赴きて、その仕懸の巧みなるに舌を巻きて驚歎せり。かくてかの密室より、お藤を助け出いだしつつ、かたのごとく老婆を縛りてまた雑具部屋へ引取りしを、知る者絶えて無なりけり。それより泰助は庭の空井戸の中にお藤を忍ばせ、再び雑具部屋へ引返して旧もとのごとく死よそおを粧よそおい、身動きもせでいたりしかば、二三度八蔵が見廻りしも全く死したる者と信じて、かくとは思い懸けざりき。

とこうするうち、高田は殺され悪僕二人は酒を飲みに出行いでゆきた

れば、時分は好しと泰助は忍びやかに身支度するうち、二階には下枝の悲鳴頻しきりなり。驚破すわやと起たつて行き見れば、この時しも得三が犠いけにえ牲を手玉に取りて、活いきみ殺しみなぶりおれる処なりし。

ここにおいて泰助も、と胸を吐つきて途方に暮れぬ。他よの事ならず。得三は刀を手にし、短銃ピストルを腰にしたり。我泰助は寸鉄も帯びず。相對して戦わば利無きこと必定なり。とあつて捕吏とりてを招集せんか、下枝は風前の燈ともしびの、非道やいばの刃にゆらぐ魂たまの緒、絶えんは半時を越すべからず。よしや下枝を救い得ずとも殺人犯の罪人を、見事我手に捕縛せば、我探偵たる義務は完まったし。されども本間が死期の依頼を天に誓いし一諾だくあり、人情としては決して下枝を死なすべからず。さりとして出いでて闘わんか、我が身命は立処に滅し、こ

の大悪人の罪状を公になし難し。噫あゝ公道人情ふたつながらこれひなり 両は 是は 非は。

人情公道最難為もつともなしがたし。若依公道人情欠もしこうどうによらばにんじようかけ。順了人

情たがわばこうどうをかく 公道虧し。如かず人情を棄てて公道に就き、眼前に下枝が

虐殺さるる深苦の様を傍観せんか、と一度は思い決めつ、我同僚さだの探偵吏に寸鉄を帯びずしてよく大功を奏するを、栄として誇りしが、今より後は我を折りて、身に護身銃を帯すべしと、男泣に泣きしとなん。

下枝が死を宣告され、仇敵あだがたきの手には死なじとて、歎き悶もたゆる風情を見て、咄嗟とつさに一の奇計を得たり。

走りて三たび雑具部屋に帰り、得右衛門の耳に囁きて、その計略を告げ、一臂いっぴの力を添えられんことを求めしかば、件くだんの滑稽翁

兼かねたり好こう事家、手足を舞わして奇絶妙と称し、兩り膚よう脱はだぎて向
 う鉢卷、用意は好よきぞやらかせと、齊ひとしく人形室の前に至れば、美
 婦人正に刑柱にあり、白刃乳ちの下に臨める刹せつ那な幸さいにして天地は
 悪魔の所有もに非ず。

得右衛門は得三の名を呼びて室外におびき出し、泰助は難無く
 室内に入りて潜むを得たり。しかる後二人計略合期ごうごして泰助をし
 て奇功を奏せしめたる、この処得右衛門大出来というべし。被かを
 被替かえて虚兵を張り、人形を身代みがわりにして下枝を隠し、一ふたたび度毒
 刃くじんを外して三度目に、得三が親仁おやじを追懸け出でて、老婆に出逢
 い、一条の物語に少しく隙ひまの取れたるにぞ、いでこの時と泰助は、
 下枝を抱いだきて易々と庭口に立出づれば、得右衛門待受けて、彼は

お藤を背に荷にない、これは下枝を肩に懸けて、滑川にぞ引揚げける。
時正に東天紅。

暗号一発捕吏を整え、倉瀬泰助疾しゅく駆して雪の下に到り見れば、老婆録は得三が乱心の手に屠ほぶられて、血に染みて死しいたり。更に進んで二階に上れば、得三は自殺して、人形の前に伏しいたり。旭の光輝ひかりに照らされたる、人形の瞳は玲瓏れいろうと人を射て、右眼、得三の死体を見て瞑めいするがごとく、左眼泰助を迎えて謝するがごとし。五体の玉は乱らんじん刃に砕けず左の肩わずかに微傷こんの痕あり。

明治二十六（一八九三）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第一巻」岩波書店

1942（昭和17）年7月30日第1刷発行

初出：「探偵小説第十一集 活人形」春陽堂

1893（明治26）年5月3日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：清角克由

2014年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

活人形

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>